
魔法少女リリカルなのは悪魔と呼ばれた少年

漆黒者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは悪魔と呼ばれた少年

【Nコード】

N82750

【作者名】

漆黒者

【あらすじ】

昔悪魔と呼ばれた少年がいた

少年は自分と同じ境遇にしてはいけないという信念をもっていた
その少年と偶然魔法と出会った少女との出逢いの物語

プロローグ（前書き）

始めての小説ですが頑張ってみます

プロローグ

?????Side

うわー来るな！悪魔！お前なんか死んでしまえ！

と言って石を投げ付けてくる人たち

痛いよやめてよと言うが石は飛んでくる

石から逃げながら家に着くと

すぐに母親のいる所に行った

少年「母さん助けてよ・なんでみんな僕の事を悪魔なんて言うの？」

母親「あなたはけして悪魔なんかじゃないわよ」

母親は泣いていた

少年は母親に抱き着くがその時何かが手につく感じがしたその手を見ると何か赤い液体がついていた。

そして母親は少年に倒れこんできた

「母さん冗談だよ ねえ起きてよねえ！」

しかし母親は反応しなかった

DZFE d i s . v . ?

プロローグ（後書き）

プロローグ終了

これから頑張って書いていきます

第一話（前書き）

連続投稿

主人公のデバイスの名前が分かります

第一話

??? Side

辺りにはなにもない荒れた荒野に一人の少年がいた

少年「ハアハアもう大丈夫だろう」

息を切らしている少年の周りは赤い黒い液体が散っていた。

そしてその少年の前にはドラゴンがいた。

しかしドラゴンは絶命していた

少年「おい出てきたらどうだ！お前がいる事は分かってんだよ！」

叫びながらいうと何も無い空間から黒いフードを被った男が出てきた。

7

黒フードの男「やあ大丈夫かい？結構危なかっただろう？」

少年「うるさいこのドラゴンはお前が召喚したものだろっ」

黒フードの男「おやいきなりなんだね私は君を助けにきたのだが？」

少年「嘘はつくなよそいつから少しだけかお前と同じ魔力がするんだよ」

黒フードの男「いやーそうかいハハハそうだよ！私とそのドラゴンを召喚したさ」

黒フードの男はおかしいそうに笑った

少年「何がおかしい！」「いや君が哀れすぎてな」「なんだと!?!?」

黒フードの男「魔眼を持っている者がいると言っのをきいて来てみたら少年だったとはな」

少年「そうかいじゃあ今からお前はそいつに殺られるんだせ」

黒フードの男「私が君に?はあーこれだから子供はまあ戦いたいのはやまやまなのだか忙しいのでな帰らせてもらおう」

少年「おいそれと帰らせる思うか?」

男はその言葉を見殺し少年に背をむけた

黒フードの男「ああそつだ置き土産を置いておこつ」

男が指を鳴らすと地面に五個ほどの魔法陣が出てきて・そこからドラゴンが出てきた。

黒フードの男「せいぜい頑張りたまえよ少年」

そついうとまた男は空間の中に消えた

少年「クソ 逃げられたかしたかない。天狼いくぞ」

と少年は刀型のデバイスにいった

天狼「Yes Master」

そう言い天狼はカートリッジロードした

すると少年から漆黒の魔力が出てきた

????SideEND

アースラSide

今アースラは少年がいる星に来ていた

リンディ「次元震があつたから来てみたけど」

エイミイ「なにもありませんねあつ艦長・羊羹とお茶です。」

リンディ「ありがとう・エイミイうーんやはり間違いだつたのかしら」

リンディは羊羹を食べながら考えていた
するとその時いきなり艦内にアラームが鳴り響いた。

リンディ「どうしたのいきなり!?!」

クロノ「母さんいえ艦長レーダに高い魔力反応がしました。
推定ランクはSSランクです。」

いくら管理局でもSSランクの魔導士などめつたにいない
それぐらい異常な高さだった

リンディ「場所は!」

クロノ「方角でここから南西10?ぐらいです!」

リンディ「分かりましたでは進路を南西に向けてその魔力反応のあ
った場所へいきます。」

クロノ「分かりました」

アースラSideEND

続く...

第一話（後書き）

いきなり魔力ランク高過ぎたかな

あとまだ主人公の名前は出ません

あと小説って難しいな（-。- ;）

第二話（前書き）

やっと主人公名前が分かります

あと戦闘シーンを書くのって難しいですね

今日は長めです

第二話

?????Side

少年は天狼に漆黒の魔力の纏わせて男が召喚していったドラゴンと戦っていた。

少年「まず一体目！」

ドラゴン「！」

ドラゴンは口から魔力弾を出す

少年「そんなもの効くか！」

少年は天狼で魔力弾を切る。その斬った勢いのまま魔力弾を出したドラゴンの首を斬った

切り裂かれた胴体から血が噴き出してまるで雨のようになっていた。

少年は血の雨など特に気にせず

残りのドラゴン達がいる所に人差し指をむけて

少年「虚閃^{セロ}」

指から虚閃を出して残りの三体の身体を貫いた

そのあと少年は自分に付いた血を見て

少年「あの黒フードの男何故俺を殺すような事を俺だってこんな眼

なんていらぬのにな」

天狼「マスターここ管理局の巡航艦が向かってきてます・どうしますか？」

少年「管理局？そうかまだ捕まるわけにはいかないから海鳴市に帰るぞ・天狼転移準備をしてくれ。」

天狼「了解・転移準備開始します・・・完了マスター良いですか？」

少年「構わない帰るか一週間ぶりだな」

天狼「そうですねでは行きましょう・転移開始」

と少年は自分の家がある海鳴市へ転移していった。

??? Side END

アースラ Side

今アースラのメンバーはさっきまで少年のいた場所にいた。

リンディ「これは酷いわね」

巡航内から映像でみているが目の前の映像には引き裂かれたドラゴンやら首が飛ばされているやら何かで身体を貫かれている死体が広がっていた。

するとクロノがドアから出てきた。

リンディ「クロノ・エイミイは大丈夫？」

クロノ「はいは大分落ち着いています。今は部屋で休ませてます」

リンディ「そう・それとさっきあった魔力反応はこのドラゴン達で良いのかしら」

クロノ「いえ・多分このドラゴン以外に何かがいたと思います・転移反応もありましたし逃げられたと思います。」

リンディ「まあ逃げられたならしかたありませんね・これは事故として処理しましょう。」

アースラSideEND

???Side

転移が終わり今は海鳴市に着いていた

少年「ふう一週間ぶりか・何故か魔力反応があるけど気のせいだろう」

これを気のせいと思ったのが失敗であった

今の少年の服装はジーンズに背中に十字架のプリントがされている黒のTシャツである天狼は待機状態にしているためバリアジャケット

トも解除している

少年「さて早く帰るか。まだ夕飯も食べてないしな」

少年はそう言いながら自分が住んでいるマンションに向かった
歩いていると道端に光る物を発見した。

少年「何だこれ。魔力の感じはするが。まあ調べてみますか。天狼
結界を頼む」

少年は目を閉じてまた開くとそのとき少年の目には赤い五芒星の紋
章が出てきた

少年「アルファステイグマ複写眼」

天狼「マスターどうですか？危険性でもありましたか？」

少年「いや全然まだ暴走とかもして無いし今から封印すれば大丈夫
だろう」

と叫ぶすぐさま少年はその青い石を封印し始めた。

少年「よしっ封印出来たぞ。かなり強く封印したから大丈夫だろう。
天狼一応お前の中で管理しといてくれ」

天狼「了解しました」

そのまま青い石は天狼の中に消えていった

少年「さて道草をくつたが早く帰りますか」

天狼「そうですね行きましょう。」

ドア前

少年「さて一週間ぶりの我が家だな」

ガチャ

少年はドアを開けた

少年「一週間じゃ変わらないかってあれ？おかしくないか・天狼この部屋は俺とお前しかいないよな」

天狼「はいそうですけど・何言っているんですか？」

少年の目の前には自分がいつも寝ているはずのベッドがあるのだから何故か金髪の女の子とオレンジ色の犬が寝ていた

少年「えーここは俺の部屋で目の前には寝るためのベッドがあって何故か金髪の女の子が寝てるんだ」

天狼「知りませんよそんなことまあ起こしてみましよう」

少年「そうだな・おーい起きろ」

女の子「えっアルフここ空き家じゃないの」

アルフ「そのはず何だけど」

少年「俺は一週間ぶりに帰ってきたからな人がいないのは当たり前だ・あとその犬は君の使い魔かい？」

女の子「何故そんな事を聞くんですか」

少年「いや君からもその犬からも魔力を感じるから」

すると犬が、

アルフ「あんた一体何者だい？」
と人型になって警戒した

女の子「あなたからも魔力を感じますが魔導士ですか？」

少年「あーそんなもんだ」

女の子「あとあなたからジュエルシードの反応しますが」

アルフ「本当かい？持っているならさっさと渡しな渡さないなら痛い思いをするよ」

と戦闘体制に入った

少年「いやまてジュエルシードって何だよ？」

いきなりの事に少年は慌てた

女の子「じゃあ小さな青い石は持ってませんか？」

少年「青い石？ああ．あれか天狼出してやれ」

天狼「分かりました」

と天狼の中から青い石が出てきた

少年「これの事か？」

少年さ女の子にさっき封印した石を見せた

女の子「それです。それを渡してくれませんか」

少年「別にいいがなんでこれを欲しがるか教えてくれるか」

女の子「えっあのすいませんが言えません」

少年「そうかい．はいあげるよ」

と少年は石を女の子になげた

女の子「えっ良いんですか？」

少年「ああ良いよ人には言えない事なんて一つや二つなんてあるかな．ああけどいつか教えてくれよな」

女の子「ありがとうございます」

アルフ「あんた以外にいいやつだねえ」

女の子がお礼を言っているとグーと何かがなった

女の子「／／／／」

少年「まさかお腹減ってる？」

女の子は顔を真っ赤にしながら頷いた。

少年「そうなのか。今から作るけど食べるか？」

アルフ「いいのかい？」

少年「別に三人ぐらい簡単だからいいよ。そういえばまだ名前を聞いて無かったな俺の名前は村谷むらたに零れいだ。そしてこいつが俺のデバイスの天狼だ」
と黒い十字架をみせた

天狼「よろしく」

女の子「よろしくね私の名前はフェイトテストタロッサです。この子は使い魔のアルフそしてこれが私のデバイスのバルディッシ」

BD「始めましてよろしくお願いします」

アルフ「よろしくね」

零「ああよろしくな。フェイト・アルフ・バルディッシ」

フェイト「うんよろしくね零」

零「さてとじゃあ作りますか」

フェイト「私も手伝う」

零「そうかじゃあ手伝ってくれ」

そうして零とフェイト・アルフの三人は出会った

続く・・・

第二話（後書き）

どうでしたか？

いきなりフェイトとの出会いがありました
が
次回から無印編に突入したいと思います

主人公設定（前書き）

連続投稿

主人公設定いきます

主人公設定

主人公の設定いきます

名前むらたに れい 村谷零

年齢 9歳

身長 146?

誕生日 10月24日

魔力光 漆黒

性格

普段は優しいが人の命を弄ぶ人間には容赦ない

見た目

首筋まで伸びた黒髪目の色も黒（イメージ的にはサムライディーパキ
ヨウの先代紅の王の黒髪バージョン）

術式 ベルカ主体のミット混合ハイブリッド（しかし複写眼解放時
はベルカ ミット完全混合ハイブリッドになる）

魔力値・SSランク（複写眼完全解放時はSSSSランク）

生まれながら目に魔眼アルファステイグマの複写眼宿していた少年その目のせいで人々

から忌み嫌われていた。

そして母親と旅をしながら暮らしていたが何者かに母親を殺させてからは一人暮らしである

その時にデバイスの天狼にも出会う

デバイス紹介

天狼
てんろう

黒い十字架型のインテリジェントデバイスAIは女性・
性格は律儀で零とは主従関係をつくっている

モード設定

1stモード

刀

2ndモード

双銃

Finalモード

???

零が母親を殺されたあとに見つけたデバイスで誰に対しても敬語で話す（零は自分に対しては堅苦しいからやらなくて良いといっているが）

アルファステイグマ

複写眼

何故か分からないが零が生まれなが持っていた魔眼能力は伝勇伝のと同じです。

それに加えて人の状態を見る事が出来る

今は普通の状態と使い分けられている

解放時は赤い五芒星の紋章が出てくる

あと一種のリミッターでもある

主人公設定（後書き）

天狼のFinaleモードはまだ謎という事で行きます

第三話（前書き）

戦闘シーンはありません

ではどうぞ

第三話

零 Side

フェイトと出会って数日たった

俺はあのあとフェイトとアルフと一緒に夕飯を食べた。そのあとに何故部屋にいたのかと聞くと俺がいない間に来て空き部屋と思っただらしくそのまま暮らしていたらしいまあ別に俺も一人暮らしたたので二人ぐらい増えても大丈夫だろうと思って今は三人で一緒に住んでいるのだが

零「この状況はなんだろうなあ」

俺の今の状況は何故かフェイトが右腕にしがみついて寝ている

フェイト「うゝん零ゝzzz」

それも凄く気持ちよさそう

寝る時は夕飯をだべたあとにすぐに布団を買いに行つて（アルフに運ぶのを手伝ってもらつた）

俺は買った布団・フェイト達はベッドで寝るといふ事になったのだが何故か朝起きたらフェイトが腕にしがみついて寝ているのである

零「考えても仕方ないか。さて朝食でも作りますか」

俺はフェイトを起こさないように布団から抜け出した

零「今日はフレンチトーストでいいか」

冷蔵庫から牛乳と卵を出してボールに移しそれに砂糖を加え食パンを浸して

熱したフライパンにいれて焼いていると

アルフとフェイトが起きてきた
アルフ「おはよう良い匂いがするけど」

フェイト「うんおはよう零」
二人ともまだ眠たそうだった

零「朝食作っているから顔洗ったあとにお皿を出してくれないか」

アルフ「分かったよ行こうフェイト」

フェイト「うん」

顔を洗ってきた二人はお皿をだしていたのでそれにフレンチトーストをのせたあとそれにサラダを付けた

これで朝食の完成

そして三人でだべ始めた

フェイト「おいしい」

アルフ「本当おいしいよ」

零「褒めてくれてありがとう」

フェイトとアルフがおいしく食べてるのを見て作ってよかったと思う

零SideEND

フェイトSide

私とアルフが零と暮らし始めて数日たった。

最初はあのあと追い出されるのかなっておもったら

零と一緒に暮らしても良いと言ってくれた

そのあと零は布団を買ってきて

零「俺はこれで寝るからフェイト達はベッドを使ってくれ

と言つて零は布団で寝ただか

私はベッドの中で眠れずにいた横を見ると布団の中で零が気持ちよ

さそう寝ていた

よっし零が寝ている布団に行つてみよう

もしかしたら寝れるかも

そして私は零が寝ている布団の中に入った

フェイト「あれ何だろ零の近くにいると安心する」

そのまま私は眠った

朝起きると零が朝食を作っていた

フェイト「おはよう零」

零「おはよう今朝食作ってるから顔洗ったあとに皿をだしてくれ」

フェイト「うん」私はアルフと一緒に顔を洗ったあとに皿をだした

零がその皿にフレンチトーストをのせてそれにサラダをつけた

そして朝食を食べたあと零と一緒に過ごした

そして夜

アルフ「フェイトジュエルシードの反応が出たよ」

フェイト「うん分かったじゃあ行こう」

バルディッシをセットアップして出ようとしたら

零「行くのか？俺も手伝おうか」

と零が言うが嬉しかったがこれは私達の事だから

フェイト「大丈夫・もしもの場合でもアルフが守ってくれるから」

アルフ「そうだよ私のご主人様には指一本触れさせないから零は心配しなくて良いよ」

零「そうか・じゃあ気をつけて行ってこい！」

フェイト「うん・行って来ます。」

そして私とアルフは飛んで行った

フェイトSideEND

零 Side

フェイトはまたあのジュエルシードと呼ばれる石を取りに行った。

零「さて俺たちも行くか天狼」

天狼「フェイトさんたちには来なくて良いと言われますけど？」

零「大丈夫遠くから見守るだけだからあと危なくなったら助けに行
くだけさ」

というと天狼は

天狼「そうですかでは」

零「おう・天狼セットアップ！」

天狼「了解セットアップ」

俺は全身黒で腕と足に白のラインが入ったバリアジャケットを着た。
そしてそのままフェイトの魔力を追って外にでた。

零 Side END

続く・・・

第三話（後書き）

一応無印編突入

次回は主人公介入するかな

第四話（前書き）

主人公が介入します。

第四話

零Side

今俺はビルからフェイトが白いバリアジャケットを着た女の子と戦っているのを見ていた

一応天狼は鞘に入れている

零「おーやってるな」

フェイトは速さで白い方の女の子を惑わしているが

白い子が撃つ砲撃もなかなか威力があつてたとえフェイトでもくらつたら大丈夫じゃないだろう

天狼「マスターどうします」

零「まだこのまま見学で」

天狼「分かりました。」

零SideEND

フェイトSide

私は今ジュエルシードをかけて白いバリアジャケットを着た女の子と戦っている

白い女の子「アクセルシュート」

女の子が複数の魔力弾を撃ってきた。

BD「ソニックムーブ」

それをソニックムーブで避けそのまま女の子の後ろに周り

フェイト「フォトンランサ」

女の子に魔力弾を当てて

ジュエルシードを封印しようとしたら突然ジュエルシードが暴走を始めた

フェイト「どうしよう」「はい割り込みゴメン」「零!?!?どうしてここに」

といきなり横から零が来たてよく見ると零の目に赤い五芒星の紋章が出ていたのです

フェイト「零その目」「ああ気にするな」「気にするよ!」

零「分かったあとで話すからお前は家に帰ってけあれは俺が封印し

とくから（アルフフェイトを連れて家に帰れ・ジュエルシードは俺が封印するから）

アルフ「（分かったよ・気をつけてね）フェイト帰るよ」

フェイト「アルフまで一人で大丈夫なの零？」

心配で聞くと

零「おう・大丈夫だから早くアルフ一緒に帰っとけ」

と笑顔で言いました。

フェイト「分かった・じゃあ帰ってきた時にその目の事教えてね・アルフ行こう」

零「分かったよ・気をつけてな」

そして私はアルフと一緒に家に帰った

フェイトSideEND

零 Side

白いバリアジャケットをきた女の子が魔力弾を撃ったがそれをフェイトがよけ後ろに周り魔力弾を撃った

零「終わりがさして・フェイトにはれる前に帰るか天狼」

天狼「待ってくださいマスターフェイトさんたちの近くに高魔力反応があります」

零「何だと！あれは」

俺はまたフェイト達が戦っている場所を見ると・フェイトがジュエルシードと言っていた青いから魔力が出ていた。

零「アルファステイグマつち複写眼発動」

複写眼を発動をしてジュエルシード見てみると魔力が暴走していた。

零「あの二人の魔力に誘発したのか」

天狼「どうします？」

零「止めるしかないだろ！」

そして俺はフェイトの隣へ行った

零「割り込みゴメン」「零!?!どうしてここに」「いや気にするな」

フェイト「零その目は何に?」

やば複写眼発動中のままだったまあい

零「気にするな」「気にするよ!」「分かったあとで話すからお前は家に帰つとけあれは俺が封印しとくから(アルフフェイトを連れて家に帰れ・ジュエルシードは俺が封印するから)

と言ったがどう説明すればいいかわ考えてなかった

アルフ「(分かったよ・気をつけてね)フェイト帰るよ」

そしてフェイトとアルフは帰って行った

天狼「その目の事はどう説明するのですか」

やっぱりそこを突っ込みますか天狼さん

零「適当に言つとけばいいだろ今はジュエルシードだ」

うーん天狼で斬つたらジュエルシードごと切れてしまうしな
よしあれでいいか

俺は空間に魔方陣を書き詠唱を始めた

零「求めるは雷鳴・稲光^{いじうち}！」

魔方阵から雷撃が出てそのままジュエルシードに当たった。

本当は詠唱なしでも出来るけど詠唱ありの方が威力が上がるからな

天狼「マスター暴走が止まりました封印しますか」

零「ああしてくれ・そのあとあの白い女の子の所に行ってみるぞ」

天狼「了解・ジュエルシード封印」

そうして封印されたジュエルシードは天狼の中に入っていった

零「さて行きますか」

そうして俺は白い女の子の所に行った

?????Side

今私は目の前の出来事に驚いていた

黒いバリアジャケットの子とジュエルシードを掛けて戦っていた負けた時に突然ジュエルシードが暴走し始めたのである

女の子「ユーノ君どうしよう」

ユーノ「待つてなのは、ジュエルシード誰かが近いているよ」

ユーノ君にそう言われて見てみると私と同年ぐらいの男の子が近いていたそして

男の子「求めるは雷鳴・稲雷こしづみ！」

といきなり男の子前に魔方陣が現れてそこから雷が出てきたの

なのは「ユーノ君なれ何だる魔法なの？」

気になりユーノ君に聞いてみたら

ユーノ「僕にも分からないミット式じゃないのは確かだよ」

ユーノ君使えないなの

そしたらその男の子がこっちにきたの

なのはSideEND

零 Side

さてまずは名前を聞かないとな

零「えーと君名前なんて言うのそのフェレットも」

女の子「高町なのはです。君の名前はなんて言うの？」

フェレット「(ユーノスクライアです)」

零「俺の名前は谷村零だ」

と自己紹介を終えたあとにフェレットいわくユーノが質問してきた

ユーノ「さつき零が使ったのは魔法はミット式じゃないよね」

稲雷見てたのかよあーどうしようかな

零「ああ・あれはミットの魔法じゃないぜ・まあ黙秘ということだ」

今俺が言ったらまずいこともあるしな

ユーノ「分かりました。」

零「さての高町の家は何処だい？夜も遅いし家まで送るよ」

まあこんな夜に女の子を一人で帰らせるのはひどいしなあとユ一ノは役に立ちそうにないし

なのは「えっえーと翠屋って言う喫茶店だけど・あとなのはでいいよ私も名前で呼ぶから」

零「分かった。なのは道案内頼めるかな家まで送るから」

なのは「分かったなの・零君」

零「あとよろしくな・なのは」

なのは「うんよろしくね・零君」

零「さてそろそろ立とうか」

となのはに言うがなのはは立たない

零「もしかして立てない？」

なのは「／／／／コクッ」

顔を赤くして縦にふった

足を見て見ると捻挫をしていた仕方ないか

零「うーん仕方ないかよつと」

そのままなのはを持ち上げたのだが

なのは「ふえええ／＼／＼」

といきなり顔を赤くしながら叫ばれた

零SideEND

なのはSide

目の前の男の子の名前は谷村零君って言うのそしてお互いの自己紹介が終わったあとに零君が

零「さての高町の家は何処だい？夜も遅いし家まで送るよ」

と言ってきたので私は

なのは「えっえーと翠屋って言う喫茶店だけど・あとなのはでいいよ私も名前で呼ぶから」

零「分かった。なのは道案内頼めるかな家まで送るから」

そして私は立とうとしたら足に痛みが走った

それをみた零君は

零「もしかして立てない？」

って聞いてきた恥ずかしいかったから

なのは「／／／／コクッ」

頷くことしかできなかった

そして零君が考え始めて

零「まあ仕方ないけどよつと」

いきなり抱き上げてくれたのですが、なぜかお姫様抱っこだったので、すそして思わず。

なのは「ふえええ／／／／」

おもいつきり叫んでしまいました。

なのはSideEND

零Side

さて今なのはの道案内のもとなのはの家の翠屋と言う喫茶店に着いたえつなのははもう大丈夫らしいから下ろしてますよ
一応行くまで疎外認識魔法を使ったから大丈夫ですよ

そして入ったのですが

なのは「お父さんたち寝てるよね」

零「いやまてなのはすごい笑顔の二人がいるんだけど」

入ったらすぐにすごい綺麗な笑顔（逆に怖い）で出迎えた二人組がいた

なのは「お父さん！お母さん！」

へえ〜お父さんとお母さんがつて若っ！！

士郎「なのはどうしんだこんなに遅くまで何処にいったんだ」

なのは「ごめんなさい」

となのはが謝っていたがそのあと俺が説明したら大丈夫だった

士郎「零君といたかなのはを家まで送ってくれてありがとう」

零「いえ夜も遅かったので女の子一人じゃ危ないですから」

桃子「本当にありがとうね・もう夜も遅いし今日は家に泊まっても構わわよ」

零「いえ大丈夫です。家に待ってる人がいますから」

桃子「そうじゃあまた明日にでも家に来て今日のお礼にケーキでもごちそうするわ」

零「分かりました。ではまた明日来ます・じゃあバイバイなのは」

なのは「バイバイ零君」

そうして俺は翠屋を出た

零SideEND

なのはSide

私はベッドの中でさっきの事を考えていた

そういえば始めてじゃないかなお父さん以外の人に抱っこされたの

それもお姫様抱っこで

今考えると恥ずかしいな／／／それと零君ってかっこよかったなの
／／／

なのは「明日また零君が来るんだよねよしもう寝よう」

そうして私は眠りについた

なのはSideEND

続
く
・
・
・

第五話（前書き）

ではでは第五話いってみようー！

第五話

零Side

なのはの家を出て家についた

零「ただいまフェイト・アルフ」

フェイト「おかえり零」

アルフ「おかえり零ジュエルシードはどうなった」

零「ああ無事封印したぜ・ほらよ」

天狼の中に入れておいたジュエルシードを出してアルフに投げた

アルフ「本当に封印したんだね」

零「フェイト・早くジュエルシードをバルディツシの中に保管しとけ」

フェイト「うん分かった」

そうしてフェイトはジュエルシードをアルフから受け取りバルディツシの中にいれた

フェイト「そういえば零さっきの目紋章は何？」

やっぱり聞いてきたかアルフを見てみるとすごい興味津々だし諦めますか

零「さっきの紋章ってこれか」

そして俺は複写眼を発動した

フェイト「そうそれ一体何なのそれ」

零「えーとなんと言うかまあ簡単に言えば魔眼だな」

フェイト「魔眼？」

フェイトは全然理解出来ずに首を傾げた

アルフ「なんだいそりゃ」

アルフ聞くなよ！説明するの面倒なんだから

零「俺もよく知らない生まれたころから持っていたからな」

全部言うのはなしで俺も本当に全部は分からないからな

零「まずこの魔眼の名前は複写眼だ。アルファステイグマそしてその能力はこの眼で見た魔法を解析して自分で使えるようにできる事」

フェイト「それって私が使う魔法もその眼で見ると零も使えるって事？」

零「ああそついう事だ」

アルフ「なんかそれチートくさくないかい」

零「だからこれは魔眼だっていったろ。俺はこれを持っている時点で人間じゃ無いんだよ」

自嘲気味に言ってみた

そしたらフェイトが

フェイト「なんでそれだけで人間じゃないって言うの？」

零「この眼のおかげで人たちからずっと悪魔なんて言われてたからな」

いやな記憶が蘇ってきた。

昔俺がまだこの眼をまだ制御出来なかった時
この眼の紋章をみた瞬間

「来るな悪魔！お前なんて死んでしまえ！」

といつてくる人やら

「お前の眼は呪われているからその眼を取り除かなければ」
と言って眼をえぐり出そうとするやつら

いろんな奴らがいたな

フェイト「れい！零！！どうしたの」

零「ああ済まない．少し昔の事を思い出していただけさ」

フェイト「本当に？なんか怖い顔だったから」

零「そうなのか．ゴメンな困らせてけど大丈夫さ．あとこの眼の事は誰にも言つなよ。」

そういつて俺はフェイトの頭を撫でた

フェイト「／／うん零がそう言うなら」

零「あと今度から俺もジュエルシードを集めるの手伝つよ」

フェイト「えつでも」

零「大丈夫だ俺はフェイト達が危なくなつた時だけ助けるよ．それ以外は近くで見守つてるだけだから」

フェイト「うん分かった．危なくなつたら助けてね」

零「任せる．絶対守つてやる」

零「よしもう寝よう」

フェイト「うん．それと零お願いがあるんだけど」

零「何？俺出来る事なら何でもいいよ」

フェイトの顔が真っ赤になって

フェイト「零一緒に寝よう？／／／」

零「・・・はい？」

フェイト「だから一緒に寝ようって言うてるの／／／」

零「えーと本当に？」

フェイト「うんいつも零が寝たあとに布団に入ってたけど最初から一緒に寝たいの／／／」

零「えーと俺でいいのか？」

フェイト「うん零がいいの」

うーんフェイトが良いって言うてるから仕方ないか

零「分かったよ．一緒に寝よう」

そして布団を敷いて寝ようとしたら

零「フェイト何で腕に抱き着いてるんだ？」

フェイトが腕に抱き着いてきた

フェイト「これの方が安心して寝れるの」

さいですかけど当たるものが当たってるんですよー

零「フェイト恥ずかしいんだけど」

フェイト「抱き着いたらだめ？」

上目づかい＋涙目で見られた絶対断れないし結局

零「分かったよフェイトの好きにしるよ／／／」

フェイト「うんおやすみ零」

零「おやすみフェイト」

アルフの方見てみると必死に笑いを堪えていた

そして結局俺はあまり眠れなかった。

零SideEND

続く・・・

第五話（後書き）

第五話終了

まだまだ頑張りますよ

第六話

零Side

俺はなのはの家に行く予定があるので家を出ようとしていた

零「じゃあ出かけて来るわ・お土産にケーキでも買ってくるから」

フェイト「うん行ってらっしゃい」

アルフ「気をつけてね」

零「行ってきます」

そして俺は家を出た。

零SideEND

なのはSide

今日は零君が来る日なの

桃子「どうしたのなのは今日はやけに機嫌が良いのね」

なのは「普通だよ」

桃子「もしかして今日零君が来るからかしら」

なのは「えっちっつ違うよ！／＼／」

お母さんなに言ってるの零君が来てくれるのは嬉しいけど

桃子「そつまあ良いわ」

カラン カラン

零「こんにちは」

そんな話しをしていたら零君が来たの

なのは「おはようなの零君」

零「ああ・おはようなのは」

桃子「いらつしゃい零君今日は無料でケーキを^ご馳走するわ」

零「えーと本当に良いんですか？」

桃子「ええ昨日なのは送ってくれたお礼だから」

零「すいませんじゃあいただきます」

桃子「じゃあご注文は？」

零「えーとチーズケーキとコーヒーを下さい」

桃子「分かったわ本当にコーヒーで良いの？」

零「はい大丈夫です」

桃子「じゃあ今準備してくるわ」

そついつとお母さんは厨房に行ったの

なのはSideEND

零Side

俺は翠屋に着いた

零「こんにちは」

なのは「おはようなの零君」

零「ああ・おはようなのは」

なのはが挨拶してきたのでかえした。元気だなあ

桃子「いらつしゃい零君今日は無料でケーキをご馳走するわ」
桃子さんも挨拶してきた正直若いと思うこれでもなのはのお母さん
だからな人類の神秘か

零「えーと本当に良いんですか？」

桃子「ええ昨日なのはを送ってくれたお礼だから」

当然の事をしただけなんだけどな

零「すみませんじゃあいただきます」

桃子「じゃあご注文は？」

俺はメニュー表をみて

零「えーとチーズケーキとコーヒーを下さい」

桃子「分かったわ本当にコーヒーで良いの？」

零「はい大丈夫です」

桃子「じゃあ今準備してくるわ」

そう言っつて桃子さんは厨房に行った。

なのは「零君つてコーヒーを飲めるの？」

零「ああ飲めるけどなのはもう少し飲んでみる？」

と聞いてみたが

なのは「いらないの。コーヒーは苦いから」

零「そうかじゃあいいや」

なのはと話していると後ろから肩を叩かれた。

後ろを見ると知らないお兄さんがいた

お兄さん「やあ君かい昨日なのはを送ってくれた少年は？」

なんかものすごい笑顔なんですけど目が笑っていないから逆に怖い

なのは「お兄ちゃん！どうしたの」

へえーお兄さんかあ〜何で殺気を当てられているんだろう

零「えーと何かようですか？」

恐る恐る聞いてみると

お兄さん「今から道場で試合でもしないか？」

だから！目が笑っていないから怖いすぎ

零「えーと今ケーキを待っているんですが？」

お兄さん「マアイイジャアナイカイコウイコウ」

なぜカタコトなんですか！

そして俺はお兄さんに連れていかれた

零SideEND

なのはSide

今零君がお兄ちゃんに道場に連れていかれたなの

桃子「お待たせ零君出来たわよってあれなのは零君は？」

お母さんがチーズケーキを持って来たのだから私に聞いてきたの

なのは「えーと零君ならお兄ちゃんに道場に連れていかれたなの」

桃子「そうけど道場には土郎さんがいるんだけど」

なのは「えっそうなの私心配になってきたじゃあ道場に行ってきたま
す」

私は急いで道場に向かった。

なのはSideEND

零 Side

今俺はなのはのお兄さんに連れていかれて（強引に）道場にきたぞしたら偶然士朗さんがいた

士朗「やあ零君どうしたんだい」

零「えーと隣に聞いてください」

士朗「恭也どうしたんだ？」

恭也「父さんなのはを連れて帰ったこの少年と試合がしたくて」

うわまだこの笑顔だ

零「という感じです。」

士朗「そうかじゃあ私が審判をしよう」

恭也「じゃあ始めようか？」

俺は諦めて試合をすることにした

零「分かりました。じゃあ俺はこの木刀を使いますね」
道場の壁に立てかけてあった木刀を使う事にした。

士朗「では両者前へ！」俺と恭也さんは向かいあった
恭也さんは小刀の二刀流である

士朗「始め！」

士朗さんの手が振り下ろされた。

恭也「はあああ！」

零「くっ」

いきなり恭也さんが小刀を振り下ろしてきたが受け止めた。

そしてそのまま小刀を受け流し木刀を横に薙ぎ払ったのだが

恭也「甘いわ！」

それを恭也さんはバックステップで避けた

恭也「本気で行くぞ神速！」

恭也さんが目の前から消えた！

恭也「もらった！」

零「後ろか!？」

バキッ！！

恭也さんの小刀を受け止めたが俺が持っていた木刀が折れてしまった

恭也「木刀が折れてしまったな代わりの木刀は「いいです。」何？」

零「だから木刀がなくてもいいです。素手でしますから」

恭也「本気か？手加減はしないぞ」

零「はい大丈夫ですよ」

と笑顔で返す今俺は気持ちが高まっていた
だからこのままの方が気分的によかった

零「次の一撃で決めますよ？良いですか！」

恭也「来い！望むところだ！」

零「では行きますよ」

俺は瞬歩で恭也さんの懐に潜りこみ
掌程を当てた

そのまま恭也さんは壁まで飛んだ

士朗「勝負あり！」

そうして試合の決着はついた

零SideEND

恭也 Side

つい本気になってしまったな

代わりの木刀を渡そうと思ったとき

恭也「木刀が折れてしまったな代わりの木刀は「いいです。「何?」

零「だから木刀がなくてもいいです。素手でしますから」

恭也「本気か?手加減はしないぞ」

零「はい大丈夫ですよ」

そして

零「次の一撃で決めますよ?良いですか!」

零君の雰囲気が変わったなではこちらも

恭也「来い!望むところだ!」

零「ではいきます」

零君が消えたと思ったら腹部に強い衝撃がきて俺は意識を失った。

恭也SideEND

なのはSide

私は道場に着いた時に零君が持っていた木刀が折れていた

恭也「木刀が折れてしまったな代わりの木刀は「いいです。「何？」

零「だから木刀がなくてもいいです。素手でしますから」

と言つて零君は構えたの

零「では行きますよ」

その瞬間零君が消えたと思つたらお兄ちゃんが飛んでいたの

そして

士朗「勝負あり！」

お父さんがそう叫んで試合は終わったの

なのはSideEND

零Side

ついでってしまったな
すると士朗さんが

士朗「零君君が最後にやったのはなんだい？」

零「最初のは瞬歩と言う高速移動法ですあとは掌程という体重移動
を使った打撃です。」

士朗「そうかいああもういいよ」

零「あのあれは大丈夫なんですかね」

と恭也さんの方をみて言う

士朗「大丈夫だよあとは私がやっておくから」

零「分かりました「零君！」どうしたなの？」

興奮気味のなのが来て

なのは「すごいのお兄ちゃんに勝つなんて」

零「いやまぐれだよ。そつだ早くケーキを食べよう」

そして俺は道場を出てなのはと一緒にケーキを食べた
そして帰る時

零「すみません桃子さんケーキまでいただいて」

桃子「いいのよ家の人と一緒に食べなさい」
そつ言つて微笑んだ

零「ありがとうございます。ではいただいていきます」

なのは「零君またきてね！」

零「時間があつた時また来るよ」

俺は翠屋を出た。

そして夜

フェイト「零・明日は私とアルフは母さんの所に行くてくるから」

零「そつかじゃあ今日貰つたケーキでも持つていけよ」

フェイト「うん・それじゃ寝よう」

零「そうだな寝るか(アルフ・明日行くフェイト母さんの所の座標軸を紙に書いておいてくれ)」

アルフ「(なんでだい?)」

零「(フェイトにある傷が気になるからなあれはジュエルシードの時に付いた傷じゃ無いだろう?)」

アルフ「(そうかい・分かったよじゃあ行く時に置いておくよ)」

零「(ありがとな・じゃあ寝よう)」

そして俺はフェイトと一緒に寝た

零SideEND

続く・・・

第六話（後書き）

やっぱり戦闘シーンは難しいな

第七話（前書き）

（ ）は念話です。

では第七話いってみよう

第七話

フェイトSide

私は昨日零が持って帰ってきたケーキを持って母さんの所に行こうとした

母さん喜んでくれるかな

フェイト「じゃあ行ってきます」

零「おう．気をつけてな」

アルフ「行ってくるよ」

そうして私は転移した。

フェイトSideEND

零Side

フェイト達が転移したあと俺はアルフが置いていった紙を見ていた。

零「天狼この場所まで転移行けるな」

天狼「はい問題ありません」

零「じゃあ行くか」

そうして俺はアルフが置いていった紙に書かれた座標位置に転移した

時の庭園

さて何だろうなここは周りは虚数空間だから単体での乗り込みは転移しかないか

まあアルフの魔力の近くにフェイトもいるだろうし行ってみますか

零SideEND

アルフSide

今この扉の向こうではフェイトがああ鬼ババアにやられてるのかね
零早くきてくれ

零「おいアルフ大丈夫かあとフェイトは何処だ」

アルフ「零・フェイトは今プレシアと一緒にいるよ」

零「なんで使い魔のお前は此処にいるんだ？」

アルフ「そんな事は関係ないよ早くフェイトを助けてくれ」

アルフSideEND

零Side

アルフを見つけたのだがフェイトの姿が無かった

零「おーいアルフ大丈夫かあとフェイトは何処だ」

アルフ「零・フェイトは今プレシアと一緒にいるよ」

プレシア？フェイトの母親の名前か

零「なんで使い魔のお前は此処にいるんだ？」

アルフ「そんな事は関係ないよ早くフェイトを助けてくれ」

いやまておかしくないか何で母親と会うだけで助けてなんだ
まさかあの傷は母親が付けたものなのか

零「まてアルフ今行ったらますますフェイトが危なくなる・だから
フェイトが扉から出てきたら早めに帰れ」

アルフ「何でだい今助けたほうが」

零「いや俺はプレシアと話しをしなくちゃいけなくなった」

零「じゃあ俺はひとまず隠れておく・フェイトには俺がいる事は言うな」

アルフ「分かったよ気をつけてね」

そうして俺は遠くの柱に気配を消して隠れていた

そしてその後すぐにフェイトが出てきたが身体は傷だらけだった
アルフはフェイトと一緒に転移して行った

零「さてお話でもしますか」

俺は扉を開けた

そして広い広間に一人の女性がいた

零「あなたがプレシアさんですか？」

プレシア「そうよ私が大魔導士プレシアテストロッサよ」

零「あなたと話しをしに来ました。フェイトの事で」

プレシア「ああ・あの人形がどうかしたの？」

今この人はなんて言った？人形だと！

零「なぜフェイトの事を人形と言うのですかあなたの娘でしょう？」

プレシア「あれが私の娘？何を言っているのあれはただの人形よさ
てあなたは消えてもらっわ」

プレシアは収束砲を俺に向けて撃ってきたが俺は避ける気になれな
かった

零「ふざけるな！？自分の娘を人形だとふざけた事いつてんじゃね
ー！」

そして俺はプレシアが撃った収束砲を素手で弾いた

弾いた収束砲は壁に穴が空き生体ポットが見えた
その生体ポットを見た瞬間言葉を失った

その中にはフェイトと瓜二つの女の子がいたのだから

零「まさか！？フェイトは」

俺はプレシアに聞くと

プレシア「そうよあの子はそのにいるアリシアテスタロッサのクロ
ーンよ」

零「クローンだとけどあなたの娘に変わりないだろ！！！」

プレシア「あれはただの人形よアリシアじゃない！」

零「フェイトはフェイトだ！！そのアリシアって子の代用品じゃな

い！」

プレシア「だから人形なのよ」

零「じゃあなんであなたはそんな悲しそうな顔をしているんですか！」

プレシア「なに言ってるのそんな事はないわ」

零「あなたはもう分かったいるはずだフェイトは自分の娘だって事を」

プレシア「話しにならないわ早く帰りなさい」

零「分かりました。また来ますその時はいい返事をください」

零「天狼転移しろ」

天狼「分かりました。」

そうしておれは時の庭園を出た

零SideEND

プレシアSide

私はさっきの少年がいった事が引っかかっていた

零「あなたはもう分かったいるはずだフェイトは自分の娘だって事を」

そんな事あるはずないわ私はあの子の事を

テーブルを見て見るとあの子が持ってきたケーキが置いてあった

プレシア「食べてみようかしら」

とテーブルに行こうとしたら

プレシア「うっげほげほもう私には時間がないのね」

手を見ると吐血していた

プレシアSideEND

続く・・・

第八話

零Side

俺は時の庭園から帰ってからフェイトとまたジュエルシードを取り始めた。

さて今はなのはとフェイトがジュエルシードが入った木を倒したあとにジュエルシードを賭けて戦いを始めようとしていた

零「アルフとユーノは手を出すなよ。これは二人の戦いだ手を出したら俺が容赦なく潰す！」

アルフ「分かったよあんたと戦って勝てる見込みなんてないからね」

ユーノ「僕も同じく君と戦うなんて自殺行為だよ」

俺もただ見ているだけだしな

一応複写眼は発動しているまた暴走した時のためだ

零SideEND

フェイトSide

私は今ジュエルシードを入った木を白い魔導士の子と倒した

なのは「ジュエルシードシリアル？」

フェイト「シリアル？」

『封印』

白い魔導士の子も封印をしたがジュエルシードは封印されずに浮いていた。

フェイト「ジュエルシードに衝撃を当てない方がいい」

なのは「そうだね昨日みたいに暴走したら私のレイジングハートもフェイトちゃんのバルディッシもかわいそうだから」

フェイト「けど譲れない」

なのは「私はフェイトちゃんとお話が出来ただけなんだけどな私が勝ったら・甘ったれじゃないことが分かったら私の話を聞いて」

そして私は白い魔導士とぶつかったが

????「ストップだ！此処での戦闘は危険過ぎる。時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ！」

何者かが真ん中にたち私のバルディッシと魔導士のデバイスを止めていた

フェイトSideEND

零Side

フェイトとなのはがぶつかったと思ったら真ん中に突然出てきた魔導士が出てきた。

????「ストップだ！此処での戦闘は危険過ぎる。時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ！」

管理局の執務官か今のフェイトなら絶対捕まるな

零「アルフ・フェイトを連れて一緒に逃げる！俺が囿になる」
アルフ「分かったよ気をつけてね（フェイト逃げるよ）」

フェイト「（アルフ！？分かった零はどうするの？）」

零「（俺が囿になるからその際に逃げる・（でも！）心配するな絶対帰るから）」

フェイト「（うん分かった絶対だよ！）」

そうしてフェイトが逃げようとした時に

なのは「フェイトちゃん！」

クロノ「待て逃がす「お前の相手は俺だ」「何？」

俺はクロノに向けて魔力弾を撃った
その際にフェイトとアルフは逃げていった。

クロノ「お前公務執行妨害だぞ！」

零「知った事じゃない・それに此処は管理外世界だ管理局の法は適用されない」

当たり前前事を言ったのだが

クロノ「うるさい！お前を公務執行妨害の罪で逮捕する」

職権乱用だろ！それ

零「まあいい・やれるもんならやってみろ（なのはとユーノは離れてる）」

なのは「（分かったなの）」

ユーノ「（分かったよ）」

そう言つて二人は離れていった俺は居合いの構えをとり

零「さて来いよ・執務官殿？」

クロノ「後悔するなよ喰らえ！！」

クロノが複数の魔力弾を放つが

零「あまい！」

クロノが放つた魔力弾を全て自分の魔力を纏わせた天狼で切った！

クロノ「何！？」

クロノがビツクリしているがまた俺は居合いの構えをとり

零「今度はこっちの番だな」

そのまま瞬歩でクロノに近づき

零「こくし いっせん鵠死一閃！！」

自分の魔力を纏わせた天狼を抜刀した。

クロノ「うわぁー」

俺の鵠死一閃を喰らったクロノは吹き飛んだがよく見るとバリアジヤケットに少しだけ破けているだった

とつさにプロテクションでも張ったかさすが執務官ではあるな

零「天狼・モード2ndだ！」

天狼「了解モード2nd」

天狼からカートリッジが一個ロードされ刀から双銃に変わった

零「さて終わりにしますか」

クロノ「はあはあ・まだだ」クロノは鵠死一閃のダメージがまだあるらしいな

零「ライトバレットシュート」

右手に持っていた銃をクロノに向けて砲撃を撃った。(デイバインバスターの色が黒いバージョン)

クロノ「くっプロテクション」

クロノは防御するが虚しくプロテクションは壊れクロノは砲撃に飲

み込まれた。

そして煙がはれてからバインドを掛けた

クロノは気絶していた。バリアジャケットもボロボロ

零「一応非殺傷設定なんだけどな」

天狼「もう少し手加減してあげればよかったのでは？」

零「仕方ないだろ久々の2ndだったんだから」

零「それと見ているんでしょこの執務官殿を取りに来ませんか？」

すると目の前に画面が出てきた

リンディ「始めましてリンディハラオウンです。すみませんが私達の艦に来てくれませんかそこの二人と一緒に？」

零「はあ分かりましたよ。」

そうして俺はなのは・ユーノ・クロノの三人と一緒に転移した。

クロノは気絶してたから俺が運んで

アースラ内

なのは「ふええすごいの!？」

アースラに着くやいなやなのはが驚いていた。

そしてクロノはエイミィって名前の女の人にあげた。

エイミー「艦長は奥の部屋にいますから少し待っていて下さい」
とエイミーはクロノを医務室に運んで行った。

エイミー「じゃあ行きましょう」

エイミーに連れていかれた部屋にさっき画面にいた女性リンディさんがいた

しかし緑茶にミルクと砂糖を入れた時はビックリしたなこの人味覚は大丈夫なのか？

そしてリンディさんがユーノに対して

リンディ「あなたも元の姿に戻れば？」

ユーノ「そうですね、ずっとこの姿だったんで」

フレットから人になった時になのはが

なのは「えっえー！？ユーノ君ってフレットじゃないの」と驚いていた。

リンディ「あなた達が何故ジュエルシードを取っていたか教えてくださいませんか？」

ユーノ「それはですね……」

ユーノが説明し始めて終わった時に医務室から戻ってきたクロノとリンディさんは

リンディ「勇敢ではあるけど」

クロノ「無謀だな」

そして

リンディ「分かりました。この事件の全権限は管理局が持ちますあなた達はいつもの生活に戻りなさい。また明日話しをします。」

零「そうですか。では帰らせていただきます。帰るぞなのは。ユーノ」

そう言って帰ろうとしたら

クロノ「まで何故帰る」

零「いや話しは終わったんでしょ俺は勝手にジュエルシードを封印しますから」

リンディ「そんなことして私達が黙って見ていると」

零「じゃあはつきり言ったらどうですかリンディさん手伝ってほしいんでしょジュエルシードを取るの」

リンディ「何でそんな事言うの？」

零「まずさつき管理局が全権限を持ちますって言ったのになんで明日話しをしないとイケないんですか？」

なのは「ふえどどういう事零君？」

話しがみえないのはが質問してきた

零「じゃあなのはに聞くけどさっきの言葉を聞いた時になんて思った？」

なのは「えーと私もお手伝いしたいなって」

零「そういう事だ．なのはならそう言うと思った．それにリンディさんあなた大方艦内から魔力値でも計測してたでしょ？そしてなのはの魔力が高い事を知り仲間にしたと思ったあとそこの執務官を倒した俺も」

なのは「じゃあなんで手伝って下さいって言わないの？」

零「その方が都合がいいからさなのはが手伝うって言ったらリンディさんは自分が動かしたい用になのはを動かせる．その逆なら自分達に不利だからね」

リンディさんの方を見ると苦虫を食べたような顔をしていた。

零「と言う事なので帰らせて頂きます」待って！」「何ですか？」

リンディさん達から背を向けて帰ろうとした時に呼び止められた。

リンディ「分かりましたさっきは騙すような言い方をしてすみません。手伝って下さい」

そう言っって頭を下げた

零「だとさなのははどうしたい？」

なのは「私は手伝いたい！」

零「そうか．じゃあ俺も手伝いますよ。しかしお願いがあります」

リンディ「まずは命令に絶対従えとかは無しであと俺の魔法の解析

とかはしないで下さい。したらこの艦を潰しますから」
最後のは殺気を出しながら言った

リンディ「分かりました。では質問があります。」

零「何ですか？」

リンディ「あなたがクロノと戦っている時に目に何か紋章が出ていましたよねあれは何ですか」

零「黙秘します」

クロノ「何故だ！」

クロノが声を荒げた

零「俺はあまり管理局を信用してませんから」

リンディ「そうですかでは話してくれるまで待っています」

零「いつか話しますよ」

そうして俺はなのはとユーノを連れて海鳴市へ帰った

零SideEND

続
く
・
・
・

第八話（後書き）

クロノはボコされましたね

モード2ndはすぐに終わってしまいました
がしかしまた出しますから

第九話（前書き）

もうすぐ無印編終了します

では第九話です。どうぞ

第九話

フェイトSide

私は零の帰りを待っていた。

フェイト「ねえアルフ？ 零大丈夫かな。もしかして管理局に捕まったりしてないよね」

心配だった私を逃がすために捕まったりしてないよね

アルフ「フェイト大丈夫だよ。零が負けるはずないよ待ってたらすぐに帰ってくるさ」

フェイト「そうだよねうん待ってようね」

そうアルフと話したら

零「だだいまフェイト・アルフ帰ってるか」

アルフ「帰ってるよおかえり零」

零「そうかフェイトは？」

フェイト「おかえり零（泣）」

私は思わず零に抱き着いてしまった

零「おいおいどうしたいきなり」

フェイト「何でもないよけどもう少しだけこうさせて」

零「分かったよ」

そう言って零は私の頭を撫でてくれた。

フェイトSideEND

零Side

アースラから帰ってきたけどリンディさんいきなり複写眼の事を聞くから困った。まあいつか言う時がきたら言うか

あとクロノはもう少し冷静になって欲しいな

零「フェイトたち無事に帰れたかな」

天狼「マスターが囷になったのですから大丈夫でしょう」

零「そうだよなよしっ入るか」

ドアを開けた

零「だだいまフェイト・アルフ帰ってるか」

アルフ「帰ってるよおかえり零」

零「そうかフェイトは？」

そしたらフェイトが

フェイト「おかえり零（泣）」

泣きながら抱き着いてきた。

零「おいおいどうしたいきなり」

俺は突然の事に驚いたが

フェイト「何でもないよけどももう少しだけこうさせて」
零「分かったよ」

そう言つて俺はフェイトの頭を撫でた。

零「もう大丈夫か？」

フェイト「大丈夫だよ」

そう言いフェイトは離れた

零「フェイトたちに話す事がある」

フェイト「何？」

零「俺は管理局の手伝いをする事になった」

フェイト「何で！？じゃあ零とは敵になるの」

零「いやそんなことはないさこれからフェイトたちの手伝いをするさ」

アルフ「言ってる意味が分からないけど」

零「一応管理局に手伝う事にはしたが俺は手伝う気はあまりないんだ」

フェイト「そうなんだじゃあ私たちの味方なんだね」

零「そうだけど・あっちにいるから助けられないかも知れない」

フェイト「それでも良いよ私は零を信じてるから」

アルフ「私もあんたの事信じるよ」

零「そうかありがとう俺を信じてくれて」

フェイト「うんじゃあ寝よう」

零「あーもうそんな時間か」

辺りはもう夜だった

零「じゃあ寝るか」

フェイト「うん」

いつもながら俺はフェイトと一緒に寝た

零SideEND

フェイトSide

私は零から離れた本当はもう少しだけ抱き着いていたけど
すると零が

零「フェイトたちに話す事がある」

何だろうか？

零「俺は管理局の手伝いをする事になった」

フェイト「何で！？じゃあ零とは敵になるの」

私は嫌だった零が敵になるなんてけど零返事は以外だった

零「いやそんなことはないさこれからもフェイトたちの手伝いをするさ」

するとアルフが

アルフ「言ってる意味が分からないけど」

零「一応管理局に手伝う事にはしたが俺は手伝う気はあまりないんだ」

フェイト「そうなんだじゃあ私たちの味方なんだね」

零「そうだけど・あっちにいるから助けられないかも知れない」

フェイト「それでも良いよ私は零を信じてるから」

これは本心だった私は零を信じているから

アルフ「私もあんたの事信じるよ」

零「そうかありがとう俺を信じてくれて」

話しが終わりもう夜だったので

フェイト「うんじゃあ寝よう」

零「あーもうそんな時間かじゃあ寝るか」

フェイト「うん」

そして私は零と一緒に寝たもちろん腕に抱き着いて

フェイトSideEND

零 Side

今日はプレシアさんに返事を聴きに行くか

零「じゃあ出かけてくるわ」

フェイト「行ってらっしゃい」

そして家を出た

時の庭園

零「いつもながら此処は不気味だよな」
など言いながら扉を開けた

零「プレシアさんいますか？」

プレシア「またあなた？何しに来たの」

零「いやいやまだ返事を聞いてないですから」

プレシア「返事ってなんのこと」

零「フェイトの事を娘として見るって事ですよ・まさかまだあなたは人形なんて事を言うのですか？」

プレシア「その事ねフェイトの事は娘と思っていたわけけど私はあの子に対して酷い事しかなかったわだから今さら母親になんてなれないわ」

零「そんな事関係ない！酷い事したって分かっているならその分だけフェイトを娘として愛してください。」

プレシア「そんな資格なんて私にはないわ」

零「過去なんて関係ない大事なのは今なんだよ！」

プレシア「私にはもう時間も無いのよ。不治の病で身体はもうボロボロなのよ。だから全ての罪を私が背負うからあなたにフェイトを任せてもいいかしら」零「罪を背負って何になるんですか！あなたが死んだらフェイトが悲しみますよそれでも良いんですか」

プレシア「だから私は最後まで悪役を演じるわ」

零「そんなこと「お願い！」「何ですか」

プレシア「これが私からの最初で最後のお願いよ聞いて！」

零「分かりました。けど俺はあなたを死なせる気なんてありませんから。家族の死は辛いですから」

プレシア「何でそんな事を？」

零「俺の家族はもういませんだから俺みたいな苦しみなんて味わって欲しくないんです！」

プレシア「そう。けど私には時間がないのよだからフェイトを頼んだわ。もう帰りなさい」

零「分かりましたでは」

そして俺は扉の外にでた

天狼「マスター良いんですかあのままだとプレシアさんは本当に死ぬ気ですよ」

零「分かってるだから俺が絶対救ってやる。俺みたいに家族を失う苦しみなんでフェイトが味わう必要なんてないからな。天狼帰るぞ！」

天狼「分かりました。転移開始」

そして俺は時の庭園を出た。

零SideEND

なのはSide

私は今アースラで待機していたすると

「高魔力反応！出ました場所は海鳴市海上」

リンディ「モニターに写して」

モニターに写っていたのはフェイトちゃんでした

リンディ「まさか海に魔力を当ててジュエルシードを出すき」

なのは「フェイトちゃんを助けないと」

クロノ「待て！このまま彼女が魔力切れを起こすのを待った方が得策だ。」

リンディ「そうねその後には捕まえた方が良いわね。なのはさん良いですね?」

私はすぐにフェイトちゃんを助けに行きたいけど行く手段が無かったその時

零「そんな事はさせませんよ」

後ろから零君が出てきたの

クロノ「お前!艦長の命令に背くのか」

零「命令?あなたたちは約束しましたよね。命令には従わなくても良いと?」

クロノ「ぐっそれは」

零「俺は友達を助けに行くんです。なのは行くぞ!」

なのは「うん!高町なのはは命令に背きます。」

そう言っつて私と零君はフェイトちゃんがいる場所まで転移した

なのはSideEND

フェイトSide

私は海に向けて魔力波を出したすると海の中から6個のジュエルシードが出てきた

フェイト「はあはあ」

アルフ「大丈夫かいフェイト？」

フェイト「大丈夫だよアルフ」

アルフにはそう言ってるが本当は危なかった

フェイト「早く封印し「フェイト！」あれ」

身体に力が入らない

そして私は海に落ちていったが

零「大丈夫かフェイト」

フェイト「えっ零どうして？」気がつくと零が受け止めていた

フェイトSideEND

零Side

転移が終わって海上にきたが突然なのはが

なのは「零君！あれ！」

なのはが指している方向でフェイトが海に向かって落ちていた

零「くそっ!？」

俺は瞬歩を使いフェイトを受け止めた

零「大丈夫かフェイト！」

フェイト「えっ零どうして？」

零「無茶しやがって！こんなになるまで」

フェイト「ごめんなさい」

なのは「フェイトちゃん大丈夫！？」

なのはも来たか

零「さてフェイトもう大丈夫か早くジュエルシードを止めるぞ」

ジュエルシードは暴走して竜巻を起こしていた

フェイト「うん大丈夫だよ」

なのは「じゃあ三人で止めよう・零君フェイトちゃん！」

零「そうだな・なのはとフェイトは左右の一つをやってくれ俺は残りの四つをやる」

フェイト「うん分かった」

なのは「分かったなの」

なのは「デイベインバスター！！！」

フェイト「プラズマスマツシャー」

どっちも暴走は終わったか次は俺の番だな

零「天狼モード2nd」

天狼「モード2nd」

俺は双銃にした天狼を残りの暴走したジュエルシードに向けて
零「ジエノサイドノヴァ！！！！」

黒い収束砲を撃った

当たったジュエルシードは暴走は止まり空中に浮いていた

なのは「すごいの」

フェイト「零大丈夫なの！？」

二人が近づいてくるが突然フェイトに向かって紫色の雷が落ちてきた

まさかプレシアさん本当に悪役のまま死ぬ気かよ

フェイト「えっ」

フェイトは突然の事に動けなかった

零「やらせるか！」俺はフェイトの前に行き

零「求めるは侵入・触走^し

魔法陣から黒い煙のようなものが出て雷を飲み込んだ

零「リンデイさん！」

リンデイ「今さっき放たれた雷からプレシアテストアロッサの居場所
が分かったわ。一回アースラに戻ってきて下さい。フェイトさんも
連れて」

零「分かりました。フェイト大丈夫だ俺を信じてくれアルフも行くぞ」

そうして俺となのは・フェイト・アルフの四人はアースラへ転移した。

零SideEND

第十話（前書き）

無印編も終わりに近づいています

では第十話です

第十話

零Side

フェイトがアースラに来たが一応腕に拘束具を付けられていたアルフは人型になって見ていた

アースラクルー「第二小隊転送完了 第一小隊侵入開始」

リンディ「お疲れ様 それから始めましてフェイトさん」

フェイトは答えない

リンディ「（母親が捕まる光景は見せない方がいいわねなのはさんお願い）」

なのは「（分かりました）フェイトちゃん私の部屋に行こう」

アースラクルー「総員玉座の間へ侵入目標を発見」

局員「プレシアテスタロツサ武装を解除してこちらに投降せよ」

局員「此処はなんだ」

隊員達がアリシアがいる部屋へ行った

そしてアリシアが画面に写ると

なのは「えっ」

フェイト「あっあっ」

フェイトとなのはは言葉を失った

プレシア「私のアリシアに近づかないで」

同員「撃てー!」

フェイト「アリシア?」

プレシア「でももう終わりにするこの子の身代わりの人形を娘扱いするのわ」

なのは「なのは」

プレシア「アリシアいつでも私に優しく笑ってくれた・せっかくあげたアリシアの記憶もあなたじゃだめだった」

なのは「やめて!やめてよ!」

プレシア「あなたなんて慰めだけに使っただけのお人形だからもういないわ・どこえなりと消えなさい!」

なのは「お願い!もうやめて!」

プレシア「良いことを教えてあげるわ」

やめるんだプレシアさんあなたは悪役にならなくても良いんだよ!

プレシア「あなたを造りだしてからずっとね私はあなたの事がやめる!」

プレシア「大嫌いだったのよ!」

フェイト「あっ」

フェイトはあまりの事に気絶した。

零SideEND

フェイトSide

零とアルフと一緒に管理局の艦に入った
そして管理局の人達が母さんを囲んだ

局員がある部屋に着いた時私は驚いた
その部屋には私とそっくりの女の子が眠っていた

プレシア「私のアリシアに近づかないで」

フェイト「アリシア？」

分からなかった
そして母さんが話し始めた
プレシア「でももう終わりにするこの子の身代わりの人形を娘扱い
するのわ」

プレシア「アリシアいつでも私に優しく笑ってくれた・せっかくあげたアリシアの記憶もあなたじゃだめだった」

なのは「やめて！やめてよ！」
プレシア「あなたなんて慰めだけに使うだけのお人形だからもういらないわ・どこえなりと消えなさい！」

なのは「お願い！もうやめて！」

プレシア「良いことを教えてあげるわあなたを造りだしてからずつとね私はあなたの事が大嫌いだったのよ！」

その言葉を聞いた瞬間目の前が暗くなった。

フェイトSideEND

零Side

今フェイトはアースラにある部屋で寝ている
やっぱり相当なショックだったんだよな

アルフ「零今から私たちはプレシアの所に行くけどあんたはどうするかい？」

零「俺はフェイトが起きてから追いかけるよ」

アルフ「分かったよ・じゃ行ってくるね」

そう言いアルフは部屋をでていった

・・・数分後フェイトが起きた

フェイト「此処は？」

零「アースラ内の部屋さフェイトはアースラのブリッジで気絶したから運んだんだ」

フェイト「そうなんだ私はアリシアって子のクローンだったんだね
いらぬ子なんだよね」

零「そんな事はないフェイトはフェイトだ！アリシアの代わりなん
かじゃないんだ！」

フェイト「零私は生きていて良いのかな？」

零「生きてても良いんだよ・俺と暮らしたフェイトは偽物なんじ
やない普通の女の子だよ」

フェイト「うんありがとう零（泣）」

零「まだお前の全ては始まってないんだよ！」

フェイト「そうだよ捨てればいいって訳じゃない。逃げればいい
って訳じゃ・もつとない！」

私の・私たちの全ては・まだ始まってもない。そうなのかな・・・
バルディッシ。

私・・・まだ始まってもないかったのかな？」

BD「GETSET」

フェイト「そうだよね・・・バルディッシも・ずっと私のそばに居
てくれたもんね・・・」

お前も・・・このまま終わるなんて・嫌だよね」

BD「YESSIR」

フェイト「私の・私たちの全てはまだ始まってもない。だから・
ホントの自分を始めるために・今までの自分を・終わらせよう。零
！私を母さんの所まで連れて行って！」

フェイトの瞳に生気が戻った

零「分かったじゃあ行こう！プレシアさんの所へ」
そうしてセットアップした俺たちはプレシアさんがいる。時の庭園
へ転移した。

零SideEND

なのはSide

私はクロノ君・ユーノ君・アルフさんの三人と一緒にフェイトちゃんのお母さんの所に行こうとしていたのけど鎧を付けた人形が邪魔をして通れないでいたの

なのは「ダイバインバスター！！」

ダイバインバスターを喰らった人形は消えるがまた出てきてきりがない

その時ユーノ君が

ユーノ「なのは！後ろ！」

なのは「えっ」

私はユーノ君に言われて後ろを振り向くと鎧の人形が斧で攻撃しようとしていた。

なのは「（私やられちゃうのかな？）」

そう思つて諦めかけた時

零「こくし いっせん 鵠死一閃！！」

後ろにいた鎧の人形が切られていたのそしていつものように刀を持つて黒いバリアジャケットを着た男の子がいたの

零「大丈夫か？なのは」

なのはSideEND

零Side

フェイトと転移してなのは達の魔力を追ってきて着いた時なのは達が戦っていたがその時ユーノが

ユーノ「なのは！後ろ！」

なのはの後ろを見ると鎧の人形が斧でなのはに攻撃しようとしていた

零「くそつ天狼！」

天狼「ソニックムーブ」

俺はソニックムーブでなのはの近くに行き（前に複写眼で見た時に

覚えた)

零「鵠死一閃!!!」

そのまま鵠死一閃で鎧の人形を切り捨てた

零「なのは？大丈夫か」

なのは「えっ零君？フェイトちゃんと一緒じゃ」

零「フェイトならいるぞ」

フェイト「零大丈夫だった!?!」

なのは「フェイトちゃん!?!」

まあ驚いてるか

零「ああ大丈夫だ早く此処を突破するか」

目の前からは鎧の人形が迫ってきていた

クロノ「分かっているならどうにかしてくれ!!!」

零「分かったから離れてる・巻き添え喰らうぞなのはお前の魔法使
うから」

なのは「ふえなんのこと?」

意味分からないよなこんな事言われても
さて

アルファステイグマ
零「複写眼発動・天狼モード2nd」

天狼「分かりました」

モード2ndにした天狼を目の前の奴らに向けそこから魔法陣を展開して

零「デイバインバスター!!!!」

名前の通りなのはデイバインバスターを撃った違う所は色が漆黒でなのかが撃つより倍の大きさな事

零「さて目の前の敵は全て消えたな行くか」

するとクロノが

クロノ「何なんだそれは!」

零「何ってデイバインバスターだけど?」

なのは「なんで零君が撃てるの?」

零「黙秘じゃだめ?」

なのは「だめなの!教えてよ!」

少し考えて

零「分かったよこの事件が終わったら教えてやるよ行くぞ」

そして俺たちはプレシアさんの所へ向かった

零SideEND

プレシア Side

もう私は後戻りは出来ないわねそして全ての罪を私が被ってアリシアと一緒に死のう

プレシア「ごめんなさいねフェイト」

私は誰もいない空間でそう呟いた

その時壁が壊れてそして一人の少年が出てきた

クロノ「時空管理局執務官クロノハラオウなんだ！プレシアテストアロツサお前を逮捕しにきた！」

プレシア「あなたに出来ると思って？私はアリシアと一緒にアルハザードへ旅立つわこんな世界に興味はない！」

クロノ「なんでそう言うんだ！世界はいつだってこんなはずじゃないことばかりだよ！」

ずっと昔から・いつだって・誰だってそうなんだ！！
こんなはずじゃない現実からにげるか・それとも立ち向かうかは・
個人の自由だ！

だけど・自分の勝手な悲しみに・無関係な人間を巻き込んでいい権利は・どこの誰にもありはしない！！」

すると

フェイト「母さん」

プレシア「何しに来たの」

フェイト「あなたに伝えたい事があります私はあなたがなんて言うが私はプレシアテストタロッサの娘フェイトテストタロッサです。」

その言葉を聞いた瞬間私はすぐにでもフェイトに抱き着きたかったけど

プレシア「人形が何を言うかと思えば私はあなたの事が嫌いだと言ったのを覚えてるの？」

フェイト「はい覚えてます。それでも私はあなたの娘には変わりありません！」

零「プレシアさんもうやめようフェイトはあなたの事を恨んでないんだ。だからアルハザードになんて行かなくても良いんだよ！」

プレシア「私には・・・もう時間がないのよ私はアリシアと一緒にアルハザードへ行く」

そう言い私はジュエルシードを発動した

プレシアSideEND

零 Side

プレシア「私には・・・もう時間がないのよ私はアリシアと一緒にアルハザードへ行く」

そう言ってプレシアさんはジュエルシードを発動した
そして次元震が起こった

プレシア「ごめんなさいねフェイト。あなたに酷い事をして」
リンディ「皆さん早く退避して下さいこのままだと時の庭園は崩れます」

フェイト「母さん！」

その瞬間プレシアさんの足場が崩れた

プレシア「フェイト・・・私はあなたの事を愛していたわそして下さいなら」

零「そんな事を言うなら！勝手に死ぬな！」

俺はプレシアさんの足場が崩れた瞬間ソニックムーヴで近づいてプレシアさんを助けた

プレシア「何で・・・助けたの？」

零「俺はあなたに言いましたよねあなたを死なせる気なんてないっ

てそれとあなたが死んだらフェイトが悲しむでしょう!」
フェイト「母さん!」

フェイトがプレシアさんに抱き着いた

プレシア「ごめんなさいね」

フェイト「うん母さんが生きてくれれば良いよ」

クロノ「早く撤退しないといけない・行くぞ」

そうして俺達はアースラへ転移した。

アースラに着いてすぐにプレシアさんは倒れてしまった
今は治療室で安静にしている

フェイト「零・・・母さん死んじゃうのかな?」

なのは「フェイトちゃん・・・」

零「大丈夫だよ・二人に頼みがあるんだけどリンディさん達を会議室に呼んでいてくれ」

フェイト「本当に大丈夫なの?」

零「ああ大丈夫さ絶対プレシアさんを死なせない」

なのは「分かったなのフェイトちゃん行くぞ!」

フェイト「うっうん分かった」

そう言っつて二人は治療室をでていった。

さてと

零「プレシアさん起きてください」

プレシア「あなたはそうか私はついてから倒れてしまったのねもう時間も無いのね」

零「率直に聞きますあなたは生きたいですかこのまま諦めて死にますか」

プレシア「生きたいわフェイトと一緒に暮らしたいわ」

零「分かりました俺が治します。」

プレシア「そんな事出来るはず」

零「出来ます。けどこの事は秘密にして下さい」

プレシア「分かったわ約束する。」

零「癒しの恵みよ！キュア！」

詠唱した瞬間プレシアさんに光が降り注いだ

プレシア「身体が軽くなつたわ本当に何をしたの？」

零「簡単に言えば魔法ですよあと急に元気になったら疑われるのでしばらくは安静にして下さい」

プレシア「分かったわそれとありがとっね」

零「どういたしまして。ではフェイト達を待たせてますので行きま
す」

そうして俺は治療室を出た

零SideEND

なのはSide

零君に言われて私はフェイトちゃんと一緒にリンデイさん達を会議
室に集めたの

リンデイ「なのはさん零君は？」

なのは「あと少しで来ると思います。」

リンデイ「そうなら待ってましょっ」

そして

零「すみません遅れました」

フェイト「零・母さんは大丈夫なの？」

フェイトちゃんがそう言うと

零「もう大丈夫さ話しが終わったら行ってこいよ」

フェイト「うん」

零「さて話しを始めましょうか」

そうして零君の話が始まったの

なのはSideEND

零Side

天狼「マスター本当に話すのですかその目の事を？」

零「ああまあ辛いが皆には教えていた方がいいだろう」

天狼「そうですかマスターがそう言うなら」

そして

会議室に着いた

零「すいません遅れました」

フェイト「零・母さんは大丈夫なの？」

零「もう大丈夫だよ・この話しが終わったら行ってみるよ」

フェイト「うん」

零「さて話しを始めましょうかまずリンディさんお願いがあるので
すが・俺が話した事を記録に残さないで下さい。あと絶対誰にも言
わないで下さい」

リンディ「分かったわ」

零「まあ皆が気になってるのはこの眼の紋章だろ」

そう言い俺はアルファステイグマ複写眼を発動した。

クロノ「その眼は何なんだ？」

零「クロノこれは魔眼だよ。まあ今から少しだけ昔ばなしに付き合
って下さいそれで俺の過去もわかりますから」

そして俺は自分の過去を話しはじめた。

零SideEND

続< . . .

第十話（後書き）

えー次回から過去編に入ります

過去編第一話（前書き）

過去編始まります。

過去編第一話

4年前

零 Side

母さんが死んだあと俺は泣いていた。そのあと起こる悲劇など知らずに

零「母さんねえ起きてよ・また笑ってよ」

母さんに抱き着いて泣いている時に後ろのドアから黒い服装の男達が入ってきた

男1「こいつか？」

男2「ああそうだ母親はもう死んでるな・仕方ないこいつだけでも連れていくぞ」

男達が言っている事が分からなかった

零「お前らは誰だ！」

男達はそれを無視して

男1「魔力値も高くない実験材料になるだろう」

男2「そうだな・おい早く連れてくぞ」

男3・4「分かりました。」

そう言つて二人が俺の腕を持ち連れて行くこととした。

零「離せ！俺をどうする気だ！」

男1「少し黙れクソガキ！」

零「うっ」

俺は男に腹を殴られて気を失つた。

そして気がつくと広い部屋にいた

零「此処は何処だ？」

辺りをみると色んな人がいてほとんどの人が此処は何処だとか泣き叫んでいたりしていた。

すると数人の白衣を着た男とその男を守るようにいる黒服の男達が部屋に入ってきた。

そしていきなりリーダー的な白衣の男が大きく手を挙げて

白衣の男「どうもモルモット諸君ご機嫌よう・私の名前はギルデイ・グラクス・喜びたまえ！君達は私の実験の研究に携えるのだから！」

その時一人の男の人がギルデイに近づきギルデイを首を掴んだ

男「ふざけるな！！このいかれたクス野郎が！！」

ギルデイ「言いたい事はそれだけか？」

その瞬間バンツ！と銃声が鳴り男は倒れた

ギルデイを見ると拳銃を持ちそれで男の頭を撃ち抜いていた。

「キヤー！！！！」

辺りに悲鳴が響いた

キルデイ「まあ反抗すればこの男のように殺す！さあ最初の実験材料はこの少年来たまえ」

ギルデイは俺呼んだ

零「分かった」

素直に従った従わなければ他の人が連れていかれるからその人達の犠牲に俺がなればいいと思ったから

俺はギルデイの所まで行きギルデイは俺の眼を見て

ギルデイ「ハハハ君はなかなか面白い眼をしてるな・実験材料には申し分ない・では私について来てくれ抵抗はするなよあの男のようになりたくなければな」

俺は死んでいる男を見て答えた

零「抵抗してどうなる・分かったから早く連れていけ」

ギルディ「うむ物分かりが良いな・では行こう」

俺はギルディの後ろについて行ったそしてこれが地獄の始まりだった。

零SideEND

続く・・・

過去編第二話

零Side

零はギルデイの後について行ったら手術室のような部屋の真ん中にベッドが置かれている部屋に着いた。

零「・・・何をやる気だ？・・・」

ギルデイ「まずは実験に耐えられるように君の身体を強化しなければいけないからね。さ・さあそのベッドによこになりたまえ」

言われたとおりベッドに寝た瞬間手足を拘束されギルデイが赤い液体が入った注射器を持ってきた。

零「それは何だ？」

ギルデイは嬉しそうに説明し始めた

ギルデイ「これは天魔の血と言え慣れれば驚異的な身体能力と回復力を持つ事が出来るロストロギアだよ・・・まあ能力はあと一つあるのだがな。君が生きていれたら教えよう・・・それにこれは拒絶

反応が酷くてねほとんどが痛みに耐えきれずに死んでしまうのだよ」「ギルデイが言ってる事は意味が分からなかったが・零は思ったこいつは心底狂っている」と。

零「そうかじゃあ始めてくれ」

ギルデイ「怖くないのかい？抵抗しても良いんだよ」

零「抵抗してどうなる・どうせ強引に入れるだろうが」

それにこいつの実験で死ぬきなどなかった。

ギルデイ「そうかい・ハハハ君は賢いな！！逃げられないを分かっ
てこの異物を受け入れるか・・・私は君の事が気に入ったよ！だが
らこんな所で死ぬなよ実験体0号」

そう言いギルデイは注射を刺したそして天魔の血と言っていた液体
が身体に入った瞬間全体に拒絶反応からくる激痛が走った！！！！

零「・・・うっ！！！！がああああ！！！！」

身体を異物が走り回り身体を蝕でいた

零「ぐっ！！！！ああああ！！！！」

そしてその激痛が1時間続いた

1時間後

零「はあ・・・はあ・・・」

ギルデイ「おめでとう君は耐えきった！・・・はれて君は私の実験に耐えれだけの身体を手に入れた。そしてリンカーコアを持つ者では初の生存者だ！」

零は痛みでほとんど聞き取れなかった。

ギルデイ「そしてもう一つの能力は・・・やはり今はやめておこう君もだめだろう。それはでは部屋で休め実験体0号」

そう言ってギルデイは部屋をでていった。零もそこで気を失って黒服の男達に運ばれた。

ギルデイ Side

ギルデイは研究室の一室でモニターを見ていた。

ギルデイ「500人中天魔の血に耐えきれた固体は100人未満・
・そしてその中からリンカーコアを持つ固体での生存者は20人しかいないか・・少な過ぎるな・・それも一人を除きがCランク以上の資質しかない・・低すぎるなこれではリンカーコアを強化しようにも資質が低すぎて先が望めないな・・やはり彼を主体に実験をしたほうが良さそうだな。」

ギルデイはそう言い零が映っているモニターを見た

ギルデイ「彼にはまず魔法を学んでもらおう・その後に細胞移植の実験でもしようか・大事な実験体だからな・フッフ・八八八!!!」

ギルデイ Side END

零 Side

四ヶ月間で零は色々な事を学んだ魔法・次元世界・時空管理局・デ
バイス・そして自分の眼が複写眼アルファステイグマと呼ばれている事などの様々な知
識を頭に叩き込んだ

零「魔法なんてもの本当にあつたんだな。」

そう呟いているとギルデイと数人の白衣を着た男達が部屋に入っ
てきた。

ギルデイ「本当に君には驚かされるよ・0号私が思つてのより早い
時間で終わらせるとは君の学習能力には興味すらわく・では次の実
験に移りたいのだから良いかね？」

零「どうせ抵抗しても無駄だろ・さっさと連れていけ」

ギルデイ「そう言ってくれれば助かる・では行くつか」

零はギルデイの後についていった。

続
く
・
・
・

零
S
i
d
e
E
N
D

過去編第三話（前書き）

天魔の血のもう一つの能力が分かります

過去編第三話

零Side

零はギルデイに広い部屋へと連れて行かれた。その部屋には零の他に同じ年の女の子やら30代ぐらいの男の人やらいろいろな歳の人
がいた

零「……俺達に次は何の実験をする気だ？……」

ギルデイ「まあ教えても良いだろう今から君達には細胞移植をして
もらう……しかしこの実験も拒絶反応が酷くてね……いくら天
魔の血に耐えきれた君達でも……死ぬかもしれないだよ。まあ
そこは自分が死なない事を願っておいてくれ」

零「……何の細胞を移植するんだ……」

ギルデイ「さすがは0号落ち着いているね……まあ教えて良いだ
ろう君達にはベルカ王朝の時代の王達や英雄・そのほかにも能力が
高かった者達の遺伝子細胞を移植する」

零「そうか・・・じゃあ始めてくれ」

ギルデイ「そうかい．では始めよう」

そして零たちに白衣の男たちが近づき注射器を刺したそして液体が入れられた瞬間辺りから拒絶反応からくる痛みで悲鳴が響いた

「ギヤアアアアアア！！！！」

「痛い！痛い！痛い！痛い！助けてくれ！！！！」

零「ぐっ！！！！ぐあああ！！！！こんなっ！！！！所で死んでたまるか！！！！！！」

零にも異なる遺伝子が自分の身体を乗っ取るうとしようと身体の中を走り周りその異物が激痛を発するそしてその激痛は四週間も続いた・・・

四週間後

辺りは血の海だった。・・零を除いて皆・細胞移植の拒絶反応に耐えられずに肉片になった人・それ以外には身体の一部が変異して死に絶えていた

零の身体も傷だらけで腕は破裂して少し繋がっているだけの状態で息をするのも苦しいのだから身体の内部までボロボロはずなのだが時間がたてば傷が治り始め息も苦しくなくなっていた。

すると部屋にギルデイと白衣を着た数人がやってきた。

ギルデイ「見たまえ諸君！！！！私たちが奇跡を見ている！0号！！君は人間を越えたのだよ！！！！」

そう研究員とギルデイは狂喜乱舞していた。その狂人達と実験された人達の中にある零は

零（ハハ・・・俺は本当に・・・人間じゃなくなったのか」

そして零が細胞移植をして2年がたった。その2年間で零は様々な実験をうけた・・・投薬による肉体強化・リンカーコアの強化・戦闘訓練などの実験を受けて今日はギルディに呼ばれて広い部屋に来ていた。

零「今日は・・・どんな実験なんだ・・・どうでもいいからさっさと始めろ」

ギルディ「ハハハ・0号・今日は天魔の血にはもう一つ能力があると私は言っただろうそれを教えようと思ってるね」

2年間たってみても零は思うこいつは本当に狂ってるよ

零「その能力ってのは何だ」

ギルディ「まてまて・そう急ぐな・・・それは君の腕にあるものが宿っているのだよ!」

零「それは何だ？」

ギルデイ「まあ腕に力を入れてみてくれ」

そうギルデイが言ったので零は試しに右腕に力を入れてみた。・・・
すると零の腕から白い炎が腕を覆い始めた。

零「・・・何だこれは？」

ギルデイ「それは貂魔てんまの炎と言い全てを燃やすと言われる炎だよ。
まあ加減は出来るらしのだから」

零は自分の腕が炎で燃えているのに痛みがしなかった

ギルデイ「それに君は魔眼と呼ばれる複写眼アルファステイグマ保持者だ・・・ハハハ
これ以上ないなこんな実験体に巡り会えた私は幸運だな」

ギルデイはそう笑い始めた

零「この炎があればお前も燃やす事も出来るな」

ギルデイ「・・・私を燃やすかまあ止めておけ・・・そろそろ時間だ
な」

ギルデイが呟いた瞬間零の右腕に痛みが走った

ギルデイ「まだ慣れないから早く消した方がいいぞ・・・自分が燃え尽きてしまうからな」

零「くそが」

零は右腕の力を抜いたそして貂魔の炎も消えた。

ギルデイ「さて今日はその貂魔の炎を使った戦闘訓練をしてもらう」

そうしてまた実験が開始された

続
く
・
・
・

過去編第四話

零Side

貂魔の炎を知ってから1年がたった。それから1年間で細胞移植に耐えきれずに理性を失って化け物になった人達の処理をしていた。

そして今・研究室の一室に零はいた・・・目の前にも人間だった人がいたもう人の形をしていなかったが

化け物「！！！」

零「・・・ごめんな・恨んでも構わないから・・・求めるは雷鳴・稲光！」

そのまま稲光は化け物を飲み込み消し炭にさせた。

零「（俺もこんなものになつてたんだな）」

するとモニターが出てきてギルデイが映った。

ギルディ「やあ・0号今日もありがとう・・・もう部屋に戻ってもいいよ」

零「そうか・分かった」

そうして零は研究室を出た

零SideEND

ギルディSide

ギルディは零が映ったモニターを見ていた。

ギルディ「ふふふ．．．残っている固体はもう0号だけか．．．
そしてクローンを造っても複写眼^{アルファステイグマ}までは持つ事が出来ないから意味
もないな．．．ハハハそれ以前にこれは欲が強すぎるなまあ仕方な
いもう少しで私の計画が完成する」

すると突然部下の研究者から通信が入る

ギルディ「どうした？」

研究者「すみません．ギルディ様．．．今複数の細胞移植の失敗作
が研究所の外に脱走しました．．．どうしますか？」

ギルディ「そうかでは．．．0号を行かせる．．．実戦訓練にもな
るだろう」

この時ギルディは知らなかったこの選択が間違いだつた事を

研究員「分かりました。では失礼します。」

そうして研究員は通信を切った

ギルデイSideEND

零Side

零が部屋で休んでいると突然研究員が入ってきた

研究員「0号・・・すまないがついさっき細胞移植の失敗作が研究所の外に脱走したのでそれを殺しに行ってください。」

零「そうか・・・分かった行ってくる」

そうして零は部屋を出た

研究所の外

研究所の外出たが零が研究所に入れられてから始めての外だった。そうして一回深呼吸をした

零「さて久々の外だな・脱走した失敗作は何処にいるんだ？」

すると森の中から失敗作と思われる叫び声が聞こえた。

零「・・・向こうか・・・さて早く終わらせるか」

零は森の中に入っていた・・・すると失敗作と言われる化け物がいた

零「三体か・・・ごめんな今楽にしてやる」

零は貂魔の炎を出したそして失敗作がいる場所に突っ込んだ。その時失敗作も零に気がつき

失敗作「！！！！」

攻撃したが・・・それを零は避け失敗作の頭を掴み

零「……燃え尽きる」

貂魔の炎で燃やしたそしてあとの一体の失敗作は同時に零に攻撃をしたが

失敗作2「……………！！！！！！」

失敗作3「……………！！！！！！」

零「くつ……………求めるは殲虹せんこう・光燐くわうりん！！」

零は魔方陣を書き詠唱した！……………魔方陣の中央から複数雷の槍が出て失敗作2・3を貫いた。

零「もう終わりか……………」

零は失敗作2・3の死体を見ながら

零「（…………これじゃ本当に…………悪魔だな）」

ガサツ！！

後ろから何かが動く音がした…………零は後ろを向き

零「誰だ！」

音がする方から出てきたのは…………

零「えっ母さん!？」

…………零の母親だった

零「何で母さんがいるんだ!…………死んだはずだろ三年前に」

母親「……………」

しかし母親は答えない・・・すると母親に変化が起こった

ぐじゅり・・・バキッ・・・ボキッ！

母親の背中から太い腕が出始め腕は分裂し脚からは何か牙のような物まで出てきた

それでもはや人間の形をしなくなった

零「・・・ハハハ・・・あいつらやりやがったな・・・あいにく母さんの遺伝子からクローンを作ってそれに細胞移植をしたか・・・そしてこんな化け物にしゃがった！」

零は目の前の母親だった物ではなく母親をこんな姿にしたギルデイ達が憎かった

失敗作「！！！」

そう言っているうちに母親の姿だった失敗作は零に向かってきた・・・
アルファステイグマ
・・・零は複写眼でまだ元に戻るか見てみるが

零「くそっ！・・・殺すしかないのかよ！」

失敗作の攻撃を避けた零に向かって失敗作が言った

失敗作「・・・殺して・・・私を殺して・・・息子にこんな姿を見せたくない」

もうほとんど自我がないのに零にそう頼んだ・・・目の前にその息子がいるのに

零「・・・分かったよ母さん・・・求めるは雷鳴・稲光いすぢ」

零そう言い稲光を撃った・・・そして母親の姿だった失敗作は最後に

失敗作「・・・あり・・・が・・・とう」

そう言って死に絶えた。・・・そして零の中で何かが崩れた

零「八八・・・八八八八！！！！・・・八八八」

その時声が聞こえた

声「破壊しろ……全てを破壊しろ……そして殺せ……
コロセコロセコロセコロセコロセコロセ」

零「（お前は誰だ……）」

声「（俺はお前だ！そうだ破壊だ全てを破壊して消せ！）」

零「くっ……あああああ……！！！！」

そうして零の複写眼は暴走した
アルファステイグマ

零SideEND

ギルデイ Side

研究員が慌てていたギルデイは通信を入れた

ギルデイ「どうした？」

研究員「それが0号が研究所を破壊し始めました。」

ギルデイ「何だと！！！」

その瞬間壁が壊れ零が入ってきた

研究員「くそっ！この悪魔が」

研究員はそう言いながら零に向けて拳銃を発砲した……しかし零の眼から魔方陣が出てきて……その弾丸を消滅させた

零？「……お前は分子レベルで分解される」

零？の指から魔方陣が出て拳銃を撃った研究員に向けた瞬間

研究員「ギャアアアアアア！！！」

研究員は腕から消滅していった

ギルデイ「ハハハ……複写眼が暴走したか私を殺すか」

零？「お前など興味などない……我は全てを破壊する……お前は……くっ！邪魔をするな」

急に零？が頭を抱え苦しみ始めた。

零「（……ギルデイは俺が殺す！……だからお前は消える！
！……）」

零？「ぐっ ヤメロ…… ヤメロヤメロヤメロー！！！！！」

零「はあ…… はあ……」

零の姿を見てギルデイは嬉しそうに

ギルデイ「凄い…… 凄いぞ0号アルファステイグマ複写眼の暴走を自力で止めるとは」

零「黙れ…… お前は俺が殺す！」

零は貂魔の炎を纏わせた右腕で殴った…… ギルデイは殴られた部分から貂魔の炎で燃え始めた

ギルデイ「ふふふ…… ハハハハ！！！！0号君は本当に良い実験材料だったよ…… ハハハハハ！！！！！」

ギルデイは燃えながら狂喜していた…… そして貂魔の炎で燃え尽

きた

零はギルデイの死体を見て

零「終わったか・・・後はこの腐った研究所を壊すだけだ」

そうして零はこの実験を終わらせるため研究所を破壊したそしてこの実験に関わった研究員も全て殺した。

零SideEND

続く・・・

過去編第四話（後書き）

過去編終わりました。

次回からは無印編に戻ります。

第十一話

零Side

零は自分の過去を説明し終わった。

零「はい．．．こんな感じで俺の過去です。そのあとふらついていたら．．．
天狼に会ったんだ．．．えーと質問がある人？」

零はフェイト達の顔をみるが青ざめていた．．．そしてリンディが
手を挙げた。

零「何ですかリンディさん？」

リンディ「あなたは不死身なの？」

そっくるかまあ普通だよな

零「．．．違います。心臓を撃たれたら死にますし．．．頭も撃ち抜か
れたら死にます．．．ただ普通の人より傷が治る時間が早いだけで
すよ」

リンディ「そう説明してくれてありがとう」

次にクロノが質問をしてきた

クロノ「すまないが話しの中で出てきた貂魔の炎とは一体なんだ」

なのは「私も気になる」

フェイト「私も」

いつもまにかなのは達も話しに参加して顔はまだすぐれないが

零「・・・これは見たほうが早いと思う」

そう言いなのは達に右腕を向けた・・・そして右腕から白い炎が出てきた。その炎は零の右腕全体に纏っていた

なのは「キレイなの」

フェイト「本当にキレイ」

そうフェイトが炎に触れようとした時

零「フェイト触るな!!」

フェイト「えっ!!」

零の叫び声に驚いたフェイトは手を引いた

零「ああゴメン……この炎に触れた燃え尽きるから……突然叫んでゴメンな」

フェイト「そうなんだ私もごめんなさい」

クロノ「その炎は魔力変化なのか？」

零「いや違う……この炎は魔力変化でもなくて……純粋な炎だから非殺傷もない触れたものを燃やすだけの能力さ……だから俺は使わない……それに俺の複写眼アルファステイクマで見た魔法は解析して自分の力に出来るから……魔力変化も使えるまあその解析した魔法を

使っている時限定だけど」

なのは「じゃあ私のディバインバスターを使ったのも零君の持っている魔眼で見たから」

零「まあそうなるな・・・けど使う時は自分の魔力だから色は自分の魔力光だけだね・・・質問はもう良いか？じゃ解散って事であとこの事は此処だけの話して誰にも話すなよ。リンディさんは話があるので残ってください。」

リンディ「分かったわ」

そうして会議室での話しが終わった。

そのあと皆がでていったあと零はリンディと二人だけになった。

リンディ「話しって何？」

零「えーと今回の事件でフェイトとプレシアさんの罪を軽く出来な

いですか？」

リンディ「無理に近いわ」

零「・・・そこを何とか出来ませんか？条件付きですから」

リンディ「その条件って？」

零「俺が管理局に入る事です。けど中学までは囑託魔導士としてそして卒業したら正式な管理局員になるって事でどうですか？」

リンディ「それは良いけど・・・あなたは良いの？管理局に入っても管理局は信用してないんじゃない？無かった」

零「フェイトとプレシアさんが幸せになれば良いんですよ。あとリンディさんみたいな人もいますし」

リンディ「分かったわ・・・努力してみるわ」

零「ありがとうございます。では俺はプレミアさんの所に行きます」

リンディ「そう・・・行ってらっしゃい」

そして俺は会議室を出た。

零SideEND

フェイトSide

今私はなのとは一緒に母さんがいる部屋に来ていた。

フェイト「母さんもう大丈夫なの？」

プレシア「ええ零君のおかげでねもう大丈夫よ」

なのは「よかったねフェイトちゃん！」

フェイト「うん」

その時零が入ってきた

零「プレシアさん体調はどうですか？」

プレシア「大分楽になったわ本当にありがとうね」

零「いえいえ」

そう言っつて零は笑っていた。

フェイス Side END

零 Sid

ジュエルシードで起きた事件まあPT事件は終わった・・・事件の重要参考人としてフェイスとプレシアさんは今本局にいるリンディさんは俺との約束を守ってくれたらしく・・・フェイスは無罪確定でプレシアさんは無罪とはいかないが管理局に研究員として働く事で実刑にはならずにすむらしい。

俺はと言うと囑託魔導士の試験を受けて合格した。・・・あまり管理局の仕事にはあまり手を出してないがやっている

そして裁判期間中の間を使ってフェイスが地球にきた。

なのは「フェイス久しぶり！」

フェイス「うん」

なのは「私フェイトちゃんと友達になりたいんだ」

フェイト「友達ってどうなるの？」

なのは「簡単だよ。名前で呼ぶは良いんだよ……私の名前は高町なのはだよ」

フェイト「なのは……なのは」

なのは「なーに？フェイトちゃん」

フェイト「なのは」

そう良い所にクロノが

クロノ「もうすぐ時間だ！」

俺はたまにクロノの事をKYだと思う……そしたら俺の所にフェイトが来て

フェイト「零・私と友達になってほしい」

零「あれ俺って前から友達だっただろ始めてあった時に名前も教え
た・・・だからもう俺はフェイトの友達さ」

フェイト「うん・そうだね」

そうしてフェイトはまたなのはの所に行った・そして互いのリボン
を交換しアースラに戻る時にまたフェイトが来た

フェイト「零少しだけ目をつむって／＼／」

顔を赤くしながらフェイトがそう言ってきた・・・俺は従い目を
つむった

零「これで良いか？」

すると頬に柔らかい感触がして慌てて目を開けると

フェイト「次に会う時までの印だよ／＼／＼じゃあねバイバイ零／
／／」

フェイトは顔を赤くしながらもの凄い勢いでアースラに帰って行った。
後ろではなののが

なのは「フェイトちゃんだけずるいなー!」

と叫んでいた

零「なあ天狼俺囑託魔導士だから本局に行つてフェイトに会う機会もあると思うんだけど何だこれ」

天狼「マスターは鈍感ですね」

零「何がだよ!」

天狼「自分に聞いてください」

そうして天狼との会話もありこれで一応PT事件に決着は着いた

零SideEND

続く...

第十一話（後書き）

えーと無印編も終了しました。
ですがまだまだ続きます。

第十二話（前書き）

今回は短いです。

第十二話

零 Side

管理外世界

零は今管理外世界に来ていたちなみに天狼はセットアップ済みである

零「天狼・・・此処でいいのか？」

天狼「はい目の前に見える研究所です。」

目の前には違法研究所が見えていた・・・そして零がフェイトと別れたあと半年がたっていたその半年間で零は管理局の仕事をしながら違法研究所を捜し・・・破壊していた

零「そうか・・・じゃあ行くか」

零はバイザーを付け違法研究所に飛び込んだ

研究員「侵入者あり……侵入者あり……見つけ次第直ちに拘束し処刑せよ」

零「さてと正面切ってきたがやっぱり見つかったな」
天狼「マスターにはもう少し慎重に進むという事ができないのですか？」

零「出来なくて悪かったな……早く終わらせるぞ」

零の目の前には武装した研究員達が待ち構えていた。

研究員「撃てー！」

武装した研究員は零に向け魔力弾を撃ってきた……零は急いでプロテクションを張り防いでいた。

零「くっ……求めるは水雲・崩雨^{みすみ}」

零は急いで魔方阵を描き詠唱した。
そして魔方阵から圧縮された水が出て、研究員達に激流となり襲っていった。

研究員「うああああ！」

研究員達は崩水みずみに飲み込まれて気絶していた。

零「さて行くか」

天狼「そうですね」

そうして零は違法研究所を破壊した。

零「さて……天狼このあと管理局の仕事は入ってるか？」

天狼「いえ……予定は何もはいつておりません」

零「そうか……了解じゃあ海鳴に帰りますか・天狼転移してくれ」

天狼「分かりました。では行きます」

そうして零は海鳴市へと転移した。

零SideEND

なのはSide

フェイトちゃん達と別れて半年がたったのそして今突然結界がはられたの

なのは「結界!?!」

なのはが窓側に向かうと辺りの雰囲気が変わっていた
するとレイジングハートが

レイハ「対象・高速で接近中」

なのは「近づいてる?・・・こっちに!?!?レイジングハート・行ってみよう」

そうして私は近づいている魔力反応に向かって行った。

そして魔力反応がしていた場所着いた
すると空から何かが落ちてきた

レイハ「誘導弾です。」

レイジングハートがそう言ったので私は急いでプロテクションを張って防いだ。

なのは「・・・うっ」

防いだ時に突然後ろから誰かが攻撃してきたのをもう片方の腕にプ

ロテクションを張って守ったの

????」「うりゃー!!!!」

なのは「くうっ………きゃーアア!!!!」

なのはは防せげずに吹き飛ばされてしまった……そしてなのはは落ちている中で

なのは「レイジングハートお願い!!」

レイハ「Standby Lady Set to appu」

なのはがセットアップしている時に赤い子は鉄球を打ってくるが……
・・・なのははよけた

なのは「いきなり襲い掛かかれる覚えはないんだけど……ど」の子
? 一体なんでこんなことするの?」

「????」

なのは「教えてくれなきゃ分からないっばー！」

なのは手を動かした・・・すると赤い子の後ろから操作した魔力弾で攻撃した。・・・しかし赤い子は防ぐ

「????」

赤い子はハンマー型のデバイスで攻撃するが・・・なのは後ろに下がりながら

レイハ「シューティングモード」

なのは「話しを・・・聞いてっばー」

レイハ「ディバインバスター」

なのはディバインバスターを撃った・・・しかし赤い子は避けた

がその時被っていた帽子に当たり飛んでいったそして赤い子はその落ちていく帽子を見た後なのはを睨んだ。

???「グラーアイゼン！カートリッジロード」

そう叫んだ・・・するとハンマー型のデバイスから何かが二回出たあとにデバイスの形が変わり先端にドリルがついた

???「ラーテンハンマー！！！」

ハンマーを回してその勢いのままなのはに向かってきた・・・なのはもプロテクションで防ぐがすぐにプロテクションは破壊されてそのままレイジングハートをえぐりながらなのはをビルに吹き飛ばした。

なのは「キヤーアアア！！！！！」

赤い子は追撃してきた

レイハ「プロテクション」

レイジングハートがプロテクションを張って攻撃に耐えるが

???「ぶち抜けー！」

アイゼン「ゲッポイ」

さらに力を込められてなのは壁に吹き飛ばされた

なのは「・・・やられちゃうの」

なのは頭の頭の中にある少年が思いだされる

なのは「・・・零君・・・」

赤い子がなのはに近づいてきた時に

???「さあーてその武装を解いてもらおうか？」

・・・聞いた事のある少年の声が聞こえた。

なのはSideEND

続く・・・

第十二話（後書き）

一応A S 編突入しました。

次回最後に聞こえた少年の正体が分かります。

第十三話

零 Side

零は海鳴に転移をしたが辺りの雰囲気が変わっていた事に気がつくいた。

零「天狼何で結界が発動してる」

天狼「分かりませんが・・・すぐ近くでなのはさんの魔力反応ともう一つ知らない魔力反応があります」

零「そうか・・・なのはがいる場所まで行ってみるか」

零が行こうとした時に桃色の閃光が空に上がった

零「あれはなのはのディバインバスターか？・・・嫌な予感がする急ぐぞ天狼・・・セットアップ！」

天狼「Set to appu」

セットアップした零は急いでなのはの魔力反応がする場所に向かった

零が反応がある場所に着いた時にはなのははすでにセットアップ状態で赤いバリアジャケットをきた子と戦っていた。

???「グラーアイゼンカートリッジロード!!!」

突然赤い子が叫ぶとハンマー型のデバイスが変化して先端にドリルがついた

そして赤い子のしたに三角形の魔法陣出てきた

そしてなのはに攻撃した・・・なのはもプロテクションで防ぐがすぐに破壊されてビルに吹き飛ばされてしまった

零「あれはやばい急いでなのはを助けるぞ・・・天狼2ndでいくぞ」

天狼「分かりました。」

零は天狼を双銃にしてなのはが吹き飛ばされたビルに行った

ビルに着くとなのはは壁に叩きつけられていた・・・零は赤い子の後ろにつき天狼を向けた

零「さあーてその武装を解いてもらおうか？」

赤い子は零の方をむいて

????「仲間か？」

零「友達だ・・・それに目の前でやられてるのを無視出来ないからな」

????「そうかじゃあお前のも、もらってやる！」

そう言ってハンマー型のデバイスで攻撃してきた

零「攻撃が単純過ぎる・・・レフトバレットシユート」

零は右手の方の銃でデバイスを受け流しそのまま左手の銃で砲撃を撃ち、当てて赤い子をビルの外に吹き飛ばした。

零「なのは大丈夫か？」

零はなのはに近づいた。

なのは「心配しないでよ……大丈夫だよ。」

なのははそう言うがさっきの攻撃でレイジングハートには亀裂が入っていた……すると転移魔法でユーノとフェイトがきた

零「フェイト、ユーノ久しぶり」

フェイト「零！？何でこの中にあるの」

ユーノ「なのは遅れてごめん」

零「いや転移して帰ってきたら偶然結界の中に入っていてなのはの魔力反応がしたからきたらこうなった。」

天狼「マスターさっき飛ばした彼女が近いてきてます。」

零「そうか・・・ユーノとフェイトとアルフはなのはを連れて先に
転移して逃げる俺があいつの相手をする」

フェイト「でも一人じゃ危険だよ!!!」

天狼「マスターもうすぐ来ます。」

零「・・・分かったフェイトは残ってくれユーノ、なのはと一緒に
転移しろ・・・急げ！」

ユーノ「分かった、無事でいてくれなのは行くよ」

なのは「・・・零君、フェイトちゃん無事に帰ってきてね」

フェイト「分かった」

零「大丈夫だよ」

そうしてユーノとなのはとアルフは転移していった。

零「さて天狼1stに戻せ・・・フェイト行くぞ」

フェイト「うん」

零は天狼を刀にしてフェイトと一緒にビルの外に出た

フェイトがバルディッシュをサイズモードにして攻撃をした。

フェイト「バルディッシュ」

バル「ハーケンセイバー」

????「グラーアイゼン」

アイゼン「シュワルベフリーゲン」

赤い子はフェイトのハーケンセイバーを避けるように魔力弾を撃った

????「障壁」

フェイトのハーケンセイバーを障壁で防ぐが下から零がきた

零「から空きだぞ」

赤い子もデバイスで天狼を防いだ

????「(ぶつ潰すのは簡単なんだけどそれじゃ意味ねーんだ魔力を持って帰らねーと……カートリッジ残り2発やれっか)」

零「はあああ!?!」

零は力を込めて飛ばすが赤い子はすぐにたいせいをもどした。……
・しかし零が設置していたバインドで手足を拘束された

フェイト「おわりだね 名前と出身世界それと目的を教えてください」
よ

天狼「フェイトさんに急速に近く魔力反応が一つ来ます!!!!」

零「何だと……フェイト! 避ける」

フェイト「えっキャーアアア」

フェイトに下から一人の甲冑服を着た女の人攻撃してきた。

零「フェイト!」はあー!!!!」「何!? くっ」

零の横からも誰かが攻撃するが零は天狼で受けて後ろに引き下がった。

????「シグナム!」

シグナム「レヴァンティンカートリッジロード」

シグナムと呼ばれた女の人のデバイスから薬莢が出されデバイスに炎が纏った

シグナム「紫電一閃！！！」

シグナムはデバイスに炎を纏わたままフェイトに攻撃をしかけた

零「あれはやばい！！ 天狼カートリッジロード！」

天狼「カートリッジロード」

零も天狼から薬莖を出して自分の魔力を纏わせてフェイトとシグナムの間に入った

シグナム「ハアアア！！！！！」

零「鵠死一閃！！！！！」

シグナムの紫電一閃と零の鵠死一閃がぶつかった！！！！
そしてお互いに距離を取った。

零「フェイト大丈夫か？」

フェイト「うん大丈夫だよ・・・ありがとう零」

零「すみませんが抵抗せずに武装を解いてくれませんか」

零はシグナムに言うが

シグナム「それは出来ないな」

零「そうですか……では力づくでいきます。」

シグナム「来い!!」

そうしてシグナムと零はぶつかった。

零SideEND

フェイトSide

フェイトは目の前でシグナムと零の戦いを見ていた。

フェイト「まだ私にもいける速さだ」

すると赤いバリアジャケットを着た子が攻撃してきた

????「つりゃー!!!」

フェイト「くっ・・・フォトンランサー」

私も魔力弾で反撃したが・・・避けられた。

すると零とシグナムの戦いに終わりがきた

零「シグナムって言いましたね終わりにしましょうか」

シグナム「何をまだ私はいけるぞ」

零「しっかりと見ててくださいよ」

突然零が消えた……。そして次の瞬間シグナムの後ろに零はいた。

零「鵠死一閃!!」

シグナム「うああああ!!」

零の技をまともに喰らったシグナムは吹き飛ばされた

????「このやるー!!よくもシグナムを」

零「まてすぐにシグナムを助けた方がいいぞ非殺傷でも直撃だったからな」

「????」くっ覚えてろよ」

そう言い赤い子はシグナムを連れてもう一人の人と転移して逃げた。

フェイトSideEND

零Side

零はシグナムと戦っていたが

零「シグナムって言いましたね次で終わらせましょう」

シグナム「何をまだ私はいけるぞ」

零「しっかりと見ててくださいよ」

そして俺は瞬歩でシグナムの後ろにいきそのまま

零「鵠死一閃!!」

シグナム「うああああ!!」

シグナムは俺の鵠死一閃をまともに受けてそのまま吹き飛ばれてしまった・・・そうしたら赤いバリアジャケットの子が向かってきた

????「このやるー!!よくもシグナムを」

零「まてすぐにシグナムを助けた方がいいぞ非殺傷でも直撃だったからな」

「???」「くっ覚えてるよ」

そう言つて赤い子はもう一人と一緒にシグナムを連れて転移した。・・・
・・・そうして結界も消えた

零「フェイト終わったな」

フェイト「そうだね・・・零アースラまで来てくれる?」

零「そうだな行くか、なのはの容態も気になるしな」

フェイト「じゃあ行こう」

そして俺とフェイトはアースラへ転移した。

続く
・
・
・
・

零
S
i
d
e
E
N
D

第十三話（後書き）

第十四話（前書き）

今回も短いです。

第十四話

零 Side

フェイトと転移した零はアースラの整備となのはの状態を調べるため本局までできていた。
そしてクロノとフェイトの二人と一緒になのはがいる病室まで行くとしていた

クロノ「久しぶりだな零」

零「ああ久しぶりクロノ」

クロノ「今回いろいろ助かったよ」

零「いや偶然海鳴に転移したらなのはが戦闘中だったから助けたま
でね」

フェイト「もうすぐ着くよ」

クロノ「じゃあこの話しは終わりだ」

零「そうだな」

そして零達はなのがいる病室に入った

零「なのは大丈夫か」

零達が入るとちょうど医務官の診察が終わった所だった

医務官「クロノ執務官話があります」

クロノ「はいなんでしょう?」

医務官「こちらへ」

クロノ「分かりました。」

そう言ってクロノと医務官は病室をでた。

なのは「フェイトちゃん、零君」

フェイト「なのは」

フェイトはなのはに近いた

零「大丈夫そうだな」

なのは「うんもう心配ないよ」

なのはがベッドから降りよとするがよろけてしまったがフェイトが受け止める

フェイト「なのは！？大丈夫」

なのは「このくらい平気だよ」

零「本当に大丈夫か？」

俺は心配で聞いてみると

なのは「うん大丈夫だよ」なのは、はそう笑顔で言った

零「そうかじゃあレイジングハートを見に行くぞ」

そうして病室を出た時にクロノと合流し四人でレイジングハートがある場所まで行った

零SideEND

リベンジSide

リンディは今エイミィと一緒にエレベーターに乗っていた。

リンディ「なのはさんはもう大丈夫そうね」

エイミィ「はいそうですね・・・それにしてもなのはちゃんを襲った魔導士は」

リンディ「そうね一連の事件と同じね」

エイミィ「はい間違いないみたいです。休暇は延期ですね・・・流れ的のうちが担当ですし」

リンディ「仕方ないわこういう仕事なのだから」

そう言いリンディはエイミィに微笑んだ

リンディSideEND

零 Side

俺はなのは、クロノ、フェイトの三人と一緒にレイジングハートとバルディッシュがある部屋に行った

ドアが開くと部屋にはアルフとユーノがいた

アルフ「なのは！フェイト！零！」

なのは「アルフさん、ユーノ君」

アルフ「なのは、零久しぶり」

ユーノ「なのは、零」

零「久しぶりだな二人とも」

挨拶をすませたあとクロノが本題に入った

クロノ「破損状況は？」

ユーノ「正直あまりよくない。今は自動修復をかけてるけど基礎構造の修復が済んだら一度再起動して部品交換とかしないと」

クロノ「そうか」

気まずい雰囲気になった時アルフが考えながら言った

アルフ「そういえば……あいつらの魔法何か変じゃ無かった？」

クロノ「あれはベルカ式だ」

アルフ「ベルカ式？」

ユーノが説明をし始めた

ユーノ「その昔ミッド式と魔法戦力を二分した魔法体系だよ。」

クロノ「遠距離や広範囲攻撃をある程度どこかして対人戦闘に特化した魔法だ」

ユーノ「最大の特徴はデバイスに組み込まれた。カートリッジシステムって呼ばれる武装だ儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込んで瞬間的に爆発的な破壊力を生む物騒な代物だよ」

アルフ「なるほどね」

するとなのはが思いついた顔をした

なのは「じゃあ零君のはミッド式？それともベルカ式？」

フェイト「そつえば零のも変だよね」

零「俺のはベルカとミッドが混ぜてるからどっちかと言うとベルカ主体のミッド式かな・・・天狼にもカートリッジシステムはついてるし」

クロノ「何故そんな術式に？」

零「言わなかったか……アルファステイグマ複写眼は相手の魔法を解析して自分の出来るだからその時に術式も解析するから混ざったんだよ」

クロノ「そうか」

零「俺は少しリンディさんに話があるから行ってくるわ」

クロノ「そうだな……僕もこのあと用があるし解散しよう」

フェイト「私もリンディ提督には用事があるから零一緒に行こう」

零「そうか一緒に行くか」

そうして零達は部屋を後にした

続
く
・
・
・

零
S
i
d
e
E
N
D

第十五話（前書き）

更新速度が遅くなりはじめた（^-^）；

では第十五話ですどうぞ

第十五話

なのはSide

私は今エイミイさんと一緒に本局を歩いていたの

エイミイ「そういえば聞いた？零君とフェイトちゃんのがリンディ提督と親子になる話し」

なのは「えっ親子ってリンディさんと零君とフェイトちゃんか？けどフェイトちゃんにはお母さんいますよね」

エイミイ「まあそんなんだけどプレシアと艦長の間で養子縁組の話をしているの今はフェイトちゃんの気持ちを待ってるのそれに零君は小さい時にお母さん亡くしてるから艦長の方からうちの子にならないかって言ってるらしいよ」

なのは「そうですか」

エイミイ「なのはちゃん的にはどうっ？」

なのは「ふえ！？うーんとなんだかすごく良いと思います」

エイミィ「そっかぁそっだね」

エイミィさんはそう言って笑った

なのはSideEND

零Side

今フェイトとリンディさんの二人と一緒にアースラを見に行っていた。

リンディ「それで零さん話して何？」

零「レイジングハートとバルディッシュにカートリッジシステムを組み込みたいのですが」

リンディ「それは何で？」

零「多分今のままだとなのはを襲った魔導士……ベルカの騎士達に勝てないと思いますそれに今レイジングハートは修復しないといけないしバルディッシュも損傷しているから」

リンディ「けど今のカートリッジシステムには問題があるのよ」

零「そこは天狼に使ってる理論を使って下さいまあ全部じゃないですが今管理局にあるのよりは良いと思いますから」

リンディ「分かったわエイミーにそのデータをあげてみて」

零「分かりました」

そしてアースラが見れる展望室についた。ドアが開くとクロノの
いたので四人でテーブルについた

リンディ「クロノ、今回の事件資料はもうみた？」

クロノ「はいさっき全部見ました。」

フェイト「なのはの世界が中心なんですね今回の魔導士襲撃事件」

リンディ「そうねなのはさんの世界から限定されてる中継ポートが
ないと転送出来ないし」

フェイト「個人転送に限定されている辺りは本局からだとかなり遠
いですね」

零「アースラが使えないのはいたいな」

クロノ「そうだな空いている艦船があればいいが」

フェイト「長期活動出来るのは二ヶ月先まで空きがないって」

クロノ「そうか」というかフェイト、零君達は良いのか？」

フェイト「何が？」

零「なにがだ？」

クロノ「囑託とはいえあくまで君達は外部協力者だ今回の件には付き合わなくても」

フェイト「クロノやリンディ提督が大変なのにのんきに遊んでなんかいられないよアルフも手伝ってくれるって言うてくれるし手伝わせて」

零「同じくまあ予定もないしクロノ達も心配だからな」

クロノ「そうかありがとう」

零「クロノが礼を言うなんて珍しいな」

クロノ「そうかまあいい」

すると静かだったリンディが突然喋った

リンディ「やっぱりあれでいきましようか!」

フェイト「あれ?」

そうして数時間後アースラススタッフが部屋に集められた

数時間後

リンディ「さて私達アースラスタッフは今回のロストログア闇の書の
の搜索及び魔導士襲撃事件の捜査を担当することになりました。
ただ肝心のアースラがしばらく使えない都合上事件発生時の近隣に
臨時作戦本部を置くことになりました。」

一同「はい！」

リンディ「司令部には私とクロノ執務官、エイミー執務官補佐、フ
イトさん、零さん、以下四名に別れています。ちなみに司令部は
なのはさんの保護を考えてなのはさんのお家のすぐ近所になりま
した。」

それを聞いたなのはは驚いた顔してそのあとに喜んだ

なのは「えっわーい！」

そのなのはの笑顔を見た後リンディさんが

リンディ「では以上で会議を終わります。各自担当に戻って下さい」

一同「分かりました」

リンディさんの一声でアーススタッフは各自の持ち場に帰るために会議室を出た

そして残った俺、なのは、フェイト、クロノ、エイミー、リンディさんの七人での話が出た

零「そういえばエイミーさん話があるんだけど」

エイミー「うん何？」

零「このデータを使ってレイジングハートとバルディッシュにカートリッジシステムを組み込んでくれませんか」

そう言っただけ俺は天狼のカートリッジシステムのデータを渡した。するとそれをみたエイミーは

エイミー「えっ！何このデータ今管理局が使ってるカートリッジシステムの理論より数倍凄い、えーと零君本当にこのデータ使って良いの」

零「はい大丈夫ですよ」

エイミー「分かったよ……これでいけるか検討して出来るなら組み込むよ」

零「分かりました……リンディさん俺は海鳴での拠点は前から住んでいるところでもいいですよね」

そうリンディさんに聞いた時フェイトが

フェイト「えっ零も一緒に住むんじゃないの？」

フェイトが驚いたように聞いてきた

零「……それはうーん住む場所はあるしな」

考えているとリンディさんが

リンディ「それについては一緒に住んでほしいわね」

零「でも」

俺が悩んでいるとなのはとフェイトが近づいてきて

なのは「零君はフェイトちゃんと一緒に暮らしたくないの？それに私のお家も近いから遊びたいの」(泣)

フェイト「零一緒に暮らそうよ」(泣)

二人とも涙目で見るのはやめてくれ
そうして結局俺は……

零「あーうん分かったよ一緒に暮らしますよ」

それに応じたそしてそれを聞いたリンディさんは

リンディ「そうよかったわねフェイトさんなのはさん」

そうリンディさんが言うと二人は

なのは「うんよかったねフェイトちゃん！」

フェイト「うん そうだね」

二人は嬉しそうに笑っていた

零「じゃあエイミーさんカートリッジシステムのは頼みましたよ」

エイミー「まかせなさい！」

リンディ「さて今から地球に行く準備をしましょうか」

クロノ「そうですね」

零「俺は前住んでいた所から荷物を取りに行つてきます・・・あまりないんですけどね。」

フェイト「そうなんだ終わつたらすぐに来る？」

フェイトがそう聞いてきたので

零「ああ終わつたら出来るだけすぐに行く」

フェイト「うん分かった」

そうしてリンディ達と零は闇の書の探索と魔導士襲撃事件を追うため地球に向かう事にした。

零SideEND

続
く
・
・
・

第十六話

零Side

俺がリンディさん達と暮らし始めて一週間がたったそしてリンディさんに呼ばれて俺とフェイトはリビングに行った

零「何ですか？リンディさん」

リンディ「二人に渡すものがあるの」

そう言いリンディさんは微笑みながら大きな四角い箱を俺とフェイトに渡してきた。

フェイト「これは？」

リンディ「開けてみて」

そう言われて零とフェイトは箱を開けた……そして中には聖祥大付属小学校の制服が入っていた。

零「これって聖祥小学校の制服ですよね？」

リンディ「ええそうよ」

フェイト「零この服ってなのはが通ってる小学校の制服だよ」

零「そうだよ、そしてリンディさん俺達にこれを渡した理由は何ですか？」

俺はそうリンディさんに聞いてみると

リンディ「理由ねえ簡単に言えば貴方達に学校に行って楽しく勉強してもらいたいかな・・・それにもう二人とも入学の手続きはもうしたから」

フェイト「でも」

フェイトはそれを聞いて戸惑っていた

リンディ「良いのよ私は貴方達にただ学校に行ってもらいたいだけだから」

フェイト「はい、ありがとうございますリンディ提督大事にします」

そう言いフェイトは制服を抱きしめた。

零「本当にありがとうございます。」

リンディ「いえいえ」

俺からもお礼を言っがリンディさんはそう言って笑った。

零SideEND

なのはSide

今日はフェイトちゃんと零君が学校に来る日なの……最初に
フェイトちゃんから聞いた時は嬉しかったな
そう思っているとクラスの男の子が慌てて入ってきたの

男の子「おい！聞いたか今日クラスに留学生がくるらしいぞ！！
それも女子だ」

男の子「何！！それは本当か！」

その話しを聞いた時にアリサちゃんが

アリサ「留学生ってフェイトの事だけどなのはが言ってる零って子は男だよね」

すずか「アリサちゃんまあ先生がきたら分かる事だし待ってよう」

アリサ「そうね」

アリサちゃんとすずかちゃんの話しを聞いている時に私は

なのは「（あれ？女の子ってフェイトちゃんだけなのかな零君は他のクラスなのかな、先生がきたら分かる事だからいいや）」

そう思っていた時に先生が教室に入ってきた

先生「はい皆さん席着いて下さいね」

男の子「はい」

そしてクラスの皆が席についた

先生「次は先週急に決まったのですが今日から新しい友達がこのクラスにやって来ます。外国からの留学生です。・・・村谷さん、フエイトさん入って来て下さい」

そう言うと教室の扉が開き零君とフエイトちゃんが入ってきたの

零君、フエイトちゃんが入ってきたとたんクラスの皆が騒ぎ始めたの
そして先生の隣に二人が来て

零「村谷零です。よろしくお願いします」

フエイト「フエイトテストロッサといます。よろしくお願いします」

す
「

そうして零君とフェイトちゃんが新しいクラスの友達になったの

なのはSideEND

零Side

俺とフェイトは一緒に制服を着て職員室に来ていた。

先生「では教室に行きましようか」

零「はい！」

そうしてフェイトと一緒に先生についていき教室へ向かってる時にフェイトが話かけてきた

フェイト「零……大丈夫かな私クラスの皆と楽しく出来るかな」

零「大丈夫だろ。なのはのクラスだしそれになのはの友達のアリサとすずかって子もいるんだろ」

フェイト「うん、そうだけど」

零「なら大丈夫だろ」

フェイトと話していると教室につき先生が

先生「じゃあ村谷さんとフェイトさん、私が呼んだら教室に入ってきて下さい」

フェイト「はい！」

零「分かりました」

そう言って先生は教室の中に入っていった。

フェイト「どう挨拶すればいいかな」

零「いや普通に挨拶すれば良いと思うんだけど……フェイトは心配性だな」

フェイト「うう／＼／＼それは言われたくないよ」

すると教室の中から先生の声がして

先生「次は先週急に決まったのですが今日から新しい友達がこのクラスにやって来ます。外国からの留学生です。・・・村谷さん、フエイトさん入って来て下さい」

零「さて行くかフエイト」

フエイト「うん」

俺とフエイトは教室のドアを開けた

そして先生の隣へ行き

零「村谷零です。よろしくお願いします」

フェイト「フェイトテストロッサといいますよろしくお願いします。」

先生「では自己紹介もすんだ事ですし一時間目は自習なので二人の質問タイムにしたいと思います。では二人の席は一番後ろですので座って下さい。」

二人「はい!」

そうして俺達が席に着いて先生の話が終わり
休憩時間の時になのはと二人の女の子がきた。

???「あんながなのはが言っていた。村谷零ね私の名前はアリサ・
バニングスよ!」

金髪で気の強そうな女の子・・・アリサと

???「アリサちゃんえーと私の名前は月村すすかっています。
よろしくね村谷君」

おしとやかそうなのがすずか

零「ああよろしく月村さんバニングスさん」

俺がそう言つと

アリサ「苗字じゃなくていいわ私も名前で呼ぶからよろしくね零」

すずか「私も名前で呼んでほしいな 零君」

零「分かったよ よろしくなアリサ すずか」

アリサ「そうよ よろしく零」

すずか「 」「よろしくね零君」

そんな話をしていたらチャイムがなり
一時間目が始まった
そしたらクラスの皆がフェイトに集まってきて

「ねえ向こうの学校ってどんな風なの」

フェイト「私、普通の学校には行ってないんだ、家庭教師というか
そんな感じの人に教わってて」

「じゃあ何処に住んでるの」

フェイト「えっえーと翠屋の近くのマンションに」

「じゃあ誰と住んでるの？」

フェイト「えっえーと零と一緒に住んでるの／＼／＼」

待て！！！！絶対誤解を生むだろその発言はリンディさんとかエイミ

イさんとかクロノも一緒住んでるだろ
それも顔を赤くして

その時アリサが来て

アリサ「ハイハイ、転入初日の留学生をそんなに皆で質問攻めしな
いの」

フェイト「アリサ」

アリサ「それにフェイトだけに質問して零にも質問しなさい！」

零「・・・いや別に俺はいいんだけど」

アリサが言った途端クラスの皆がフェイトから俺の席にきて

「急な転校だけど何で」

零「いろいろあってな」

「さっきフェイトちゃんが言った事は本当なのか!？」

零「それは……本当の事だ俺はフェイトと一緒に住んでいるな」

「二人暮らしなの？」

零「いや俺とフェイトを加えてあと三人と一緒に住んでるな」

そんな感じで俺は授業が終わるまでクラスの皆からの質問攻めにあ
った

そして昼休み

俺は机に突っ伏していた。するとなのは達がきて

なのは「にゃははは一時間目は大変だったね零君」

零「なのはか以外に疲れた」

フエイト「零今からなのは達と屋上でお弁当を一緒に食べるんだけど零も一緒に食べよう」

零「ああ分かった行くよ」

机から顔をあげて俺はなのは達と一緒に屋上に行った。

零SideEND

続
く
・
・
・
・

第十七話（前書き）

第十七話です。

第十七話

零Side

学校も終わり帰ろうとした時にアリサから呼び止められた

アリサ「ねえ零皆と一緒に帰るんだけどあんたも一緒に帰らない」

零「やめとく」

アリサ「何だよ!」

すずか「アリサちゃん零君にもいろいろあると思うからまた明日にでも帰れば良いでしょ?」

アリサ「うっそれは分かったわよ……零明日は皆で帰るわよ! いい絶対よ!」

零「ああ分かった。じゃあ俺はもう行くよ」

そう言って俺は教室を出た

零SideEND

なのはSide

零君が教室を出た後私はアリサちゃん達と一緒に帰っていた。

アリサ「もう零の奴何なのよ！」

なのは「にはは仕方ないよ零君にも予定とかあるし」

フェイト「それに明日は一緒に帰るって約束してくれたから大丈夫だよ」

アリサ「そうねじゃあ私達はここで」

すずか「そうだね、なのはちゃんフェイトちゃんまた明日学校で会おうね」

なのは「うんそうだねまた明日」

フェイト「アリサ、すずかバイバイ」

アリサ「また明日ね」

そう言ってアリサちゃんとすずかちゃんは家に向かって帰っていった。

フェイト「なのは、私達も帰ろう」

なのは「そうだねフェイトちゃん」

私達も自分達の家に向かって帰った。

なのはSideEND

零Side

俺は学校を出たあと一人路地を歩いていた。
しかし何かがおかしかった

零「それにしても人の気配が無さすぎる」

天狼「そうですね」

すると向こう側からスーツをきた三十代ぐらいの男がやってきた
その男は俺に近づいてきて

男「やあ少年久しぶりだね」

零「すみませんがどちら様ですか？」

そう聞くと男は

男「ああそうだったな私はあの時は黒いフードで顔を隠していたからね分からないのも仕方ないか」

零「まさかあの時の！」

俺はすぐに男から距離をとった

男「いい判断だ！まあ警戒するなよ少年今日は戦いにきたわけじゃないんだよ」

零「じゃあ何をしにきた俺はあんたに用はないんだけど」

すぐにでも戦えるように俺は構えた

男「まあまずは自己紹介からいこうか私の名前はグラウス……
ラグサ・メイティ」

零「……村谷零だ」

ラグサ「零か単刀直入に聞こう私の仲間にならないか？」

零「断る！！あにく俺には守るものが出来たからな」

ラグサ「同じ仲間だろう？」

零「意味が分からないな」

ラグサ「まあこれを見たまえ」

ラグサは手を自分の目に被せた。……そして次に手を目からどかした時にグラウスの目には円の中に何かの術式が書かれた紋章が出ていた。

零「それは何だ？」

ラグサ「これは君が持っている複製眼と同じ魔眼で名を刻斬眼と言アルファステイグマうだこれを見ても私の仲間にはならないか？」
スラッシュメーデ

零「ああ、俺はあんたの仲間にはならないな」

ラグサ「そうかいこの刻斬眼には能力があつてね」

そうラグサが言った瞬間零の目の前から消えた！？

零「何処だ！」

ラグサ「ここだよ少年」

グジュー！！！！

声が出た時にはラグサの腕が腹部に刺さっていた。

零「何が起こった!？」

ラグサ「ふっ!!」

ラグサは零の腹から腕を勢いよく抜いた

零「何をした」

ラグサ「この眼の能力は人の限界を超えた速度まあ簡単に言えば神

速まで身体をもっていけるんだよ……まあ説明はもういいかな
！」

そう説明をしたグラウスは零に向けて蹴りを放った

零「（くそっ！！）」

とっさに零は腕でガードするが

ラグサ「無駄だよ」

ラグサはガードした腕事零を吹っ飛ばした………そして吹き
飛ばされた零は電柱に叩きつけられた

零「ぐっ！！！（今の蹴りで腕が折れたな）」

ラグサ「さて私はもう行くよ、まあ管理局には君が知らない事がま
だあるよ」

そう言い残してラグサは転移して消えた

天狼「大丈夫ですか！？マスター！」

零「ああこのぐらいはすぐに治る」

さっきラグサから刺された傷はもう治りかけていた

零「腕も・・・もう大丈夫だな」

天狼「マスターリンディさんから通信が入ってます」

零「そうか開いてくれ」

そう言い天狼は通信が開いた

リンディ「零さんまた守護騎士達が出たわ・・・クロノ達が出て

るけどあなたも向かって下さい」

零「分かりました。」

リンディ「場所は天狼に送ってるわ……それになのはさんとフ
イトさんもすぐに駆け付けるから」

零「直ったんですか！」

リンディ「ええけど起動テストは出来てないからぶつつけ本番にな
るけど」

零「そうですねかじゃあなのは達が来るまで守護騎士達は抑えておき
ます」

リンディ「分かったわ気をつけてね」

零「大丈夫ですよでは」

そうしてリンディさんとの通信を切った

零「天狼、場所は送られてきたか」

天狼「はい大丈夫です。」

零「じゃあ行くぞ！天狼セットアップ」

天狼「Set to appu」

天狼をセットアップした俺はクロノと守護騎士達がいる場所へと向かった

謝辞

続く

第十七話（後書き）

新しい魔眼が出ましたね

やっぱり能力の説明が足りなかったかな

第十八話（前書き）

今回は短いです。

第十八話

シグナムSide

今私は管理局の少年と向き合っていた

クロノ「武装を解いておとなしく投降しろ」

シグナム「断る！我らにはやる事があるからな」

クロノ「なら力づくで拘束してやる」

シグナム「出来るものならやってみるがい手加減はせんぞ」

そしてお互いにデバイスを構えた

しかし

ヴィータ「うりゃー！ー！ー！」

突然横からヴィータ現れクロノに向けて攻撃をした……クロノも気がついて即座にプロテクションを張るが

ヴィータ「無駄だー！アイゼン」

グラールアイゼンから薬莖が一つできてさらにデバイスの威力があがりクロノの張ったプロテクションは壊された。

クロノ「うあああああ！ー！ー！」

クロノは防御を破壊させそのままビルへと飛ばされた

ヴィータ「何やってんだよシグナム！早く帰らないとはやてが心配するだろ」

シグナム「そうだな主を心配させてはいけないな」

その時

零「まだ逃げるのは早いな」

あの黒いバリアジャケットをきた少年がきた

シグナムSideEND

零 Side

さてシグナム達に追いついたがどうするかな

零「（クロノ大丈夫か）」

クロノ「（ああ大丈夫だ）」

零「（そうか、シグナム達は俺がやるからお前は闇の書を持ってる奴を捜しとけ）」

クロノ「（分かった、気をつけるよ）」

零「（了解）」

クロノとの念話を終えて俺はシグナム達を見た……二人ともすでにデバイスを構えて戦闘体制をとっていた。

天狼「（どうしますか？）」

零「（まずは話合いだろ）」

天狼「（前回容赦なく倒したのにですか）」

零「（それは言っな）」

天狼「（そうですか、まあ頑張ってください）」

俺はシグナム達に話かけた

零「シグナム、俺は戦いたくはない、だから降伏してくれ」

シグナム「さっきの局員にも言ったが断る。我らにはやる事がある！」

零「それはお前達の主が命じた事なのか」

シグナム「これは我らの独断だ主は関係ない！それに零と言っていたなお前こそここはもう戦場だ。戦うしかない」

そう言いシグナムはデバイスを構えた。

零「そうか。じゃあ仕方ないか」

俺も天狼を構えた

ヴィータ「シグナム。今回は私もやるからな」

ヴィータも構えた

シグナム「仕方ない騎士道に反するが我らヴォルケンリッタに負けは許さない！……零手加減はしないこい！」

そうしてぶつかり合う時に突然通信がきた

エイミー「零君今、なのはちゃんとフェイトちゃんがそっちについてたよ」

それを聞いた俺はなのは達をみつけシグナム達にいった

零「シグナム、人数の追加だ」

シグナム「どどういう意味だ」

零「あれを見るよ」

そうして俺はなのは達を見た

なのは「レイジングハート・エクセリオン」

フェイト「バルディッシュ・アサルト」

『セットアップ！！！』

そしてその時なのはとフェイトの二人は新しい力を手に入れた瞬間だった

続
く
・
・
・
・

第十八話（後書き）

シグナム達の口調が少しおかしかったかな

第十九話

零Side

なのは達がセットアップして零の近くまできた

なのは「零君大丈夫？」

零「いや戦つてもないから まあこれでいいだろ……なのは、
フェイト」

275

フェイト「何 零？」

なのは「零君 何？」

そう二人は聞いてきた それにたいして零は

零「なのははヴィータの相手をしてくれ。自分の話を聞いてほしいんだろ。フェイトはシグナムと戦ってくれ」

零の言葉を聞いたなのはとフェイトある事に気がつき零に聞いた

なのは「零君はどうするの?」

零「まあ俺は闇の書を持つてる奴を捜す。シグナム!ヴィータ!まあこんな感じだ」

零はシグナム達に向けてそう言ったが

ヴィータ「あの二人に任せていいのかよ!前に私達に負けたやつらだぜ」

ヴィータの言葉を聞いた零は笑った。

零「ハハハ・・・ヴィータあんまり見くびるなよ。すぐに負けるぞ。」

ヴィータにそう言ったあと零は後ろの二人の方を向いて

零「なのは、フェイト頑張れよ！」

なのは「うん！ヴィータちゃんに私の話を聞いてもらうの」

フェイト「・・・私はシグナムに勝ちたい！」

零「・・・そうか、じゃあな」

そう言い零は二人から離れて行った

零SideEND

なのはSide

零君が行った後に残された私とフェイトちゃんはシグナムさんとヴィータちゃんと戦っていた。

なのは「アクセルシュート!!!」

ヴィータ「アイゼン!!!」

アイゼン「プロテクション」

なのはが放った魔力弾をヴィータはプロテクションで防いだ

ヴィータ「おい高町なんとか!!!」

なのは「なのはだよ!!!ヴィータちゃん!」

ヴィータ「うるせー!!!」

そう言いながらヴィータはなのはに向かって突っ込んできた!

なのは「レイジングハート!」

レイ「プロテクション」

なのは「それ！」

なのはヴィータの攻撃を防ぎさつき飛ばした魔力弾を操作してヴィータの後ろから攻撃をした。

ヴィータ「・・・くっ」

ヴィータは慌ててよけた

なのは「ヴィータちゃん私はただお話したいだけなの」

ヴィータ「うるせーこっちは早く帰らないといけねえーだ！！！お前の話なんて聞いてられるか」

なのは「いいもん意地でも私の話を聞いてもらおうよ。ヴィータちゃん」

なのはがレイジングハートを構え

ヴィータ「やってみやがれ！」

ヴィータもアイゼンを構えた
そしてお互いにぶつかり合った

なのはSideEND

フェイトSide

なのはがヴァータと戦っているなかフェイトはシグナムと向き合っていた

フェイト「シグナム・本当に降参するきはないの？」

シグナム「テストロッサ・自分の意志を貫きたいなら私に勝ってからにしろ・・・手加減はしないからな」

フェイト「分かりました。・・・私も手加減無しの真剣勝負をしましょう！」

フェイトはそう言いバルディッシュを構えた

シグナム「来い！テストロッサ」

シグナムもレヴァンティンを構えた。

・・・そして

自分達の意志を貫く為の戦いが始まった。

フヘイトSideEND

零Side

零は二人から別れたあと闇の書を持っている奴を探していた。

天狼「マスター居場所とかは分かるのですか？」

零「いや勘だが多分・後ろの方にいる奴が怪しいと思っから守護騎士の中で戦いに参加してない奴を見つけてくれ」

天狼「分かりました。」

天狼がサーチをしている時クロノからの念話があった

クロノ「（零聞こえるか！？）」

零「（どうしたクロノ）」

クロノ「（闇の書を持っている守護騎士を発見した。今から投降を願う）」

零「（了解・今から俺もそっちへ向かう気をつけるよ）」

クロノ「（分かってるよ・じゃあ切るよ）」

クロノとの念話を切ったあとに

零「天狼・クロノの今いる位置分かるか？」

天狼「はい大丈夫です。」

零「そうか・一応複写眼は発動しておくかな……天狼クロノの
アルファステイグマ
いる場所までのルート算出頼む」

天狼「分かりました。では行きますよ」

天狼の指示でクロノがいると思う場所に着いた俺はクロノが闇の書を持っている守護騎士にデバイスを向けていた。

零「多分あれなら抵抗しないで投降するな」

天狼「行ってみましょう」

そのままクロノの所へ行こうとした時に……突然仮面を被った謎の人物がクロノに近づいていてクロノを蹴り飛ばした。

不意打ちを喰らったクロノはフェンスに叩きつけられた

零「ちつ天狼!! 2ndで行くぞ」

天狼「分かりました。」

零は素早く天狼を双銃にして仮面の人物の後ろにまわった
そして天狼を向けた

零「何処の誰だか知らないが抵抗せずに投降してもらおう」

仮面「それは出来ない相談だな！！！」

仮面の人物は後ろに振り向き零に対して裏拳を放った………し
かし零は

零「くっ……じゃあ強制的に捕まえます。」

右手の方の銃で裏拳を抑え左手の方の銃から魔力弾を撃った

仮面「何！？ぐっ……」

魔力弾に直撃した仮面の人物は一旦零と距離をとった

仮面「……仕方ない」

零「喰らうか!!」

仮面の人物は零に向かって魔力弾を放つが零はそれをプロテクションで防いだ

仮面「ここまでだな」

零「待て！逃がすか」

零が防いでいる時仮面の人物は転移していた。

零「……逃げられたか」

天狼「仕方ないでしょう……しかし今は守護騎士達の方を」

零「そうだな」

零は闇の書を持っている守護騎士の所に行った

零「あなたも投降してほしいのですが」

「……それは」

そう話している時に零は複写眼で闇の書を見た

アルファステイグマ

零「……この魔導書壊れてないか」

????「この状況どうしよう」

零はクロノに念話繋げた

零「（仕方ない……クロノ命令違反する）」

クロノ「（どういう事だ!!!）」

零「（違反した罰は後で受ける）」

零は天狼を上空に向けて

零「ジエノサイドノヴァー!!!」

零は撃った砲撃で結界を破壊した。

????「何を？」

零「いいからさっさといけ!!!」

????「よく分からないけどありがとう」

そう言って守護騎士は転移して逃げた

その後クロノが近づいてきて零の胸倉を掴んで零に向かい叫んだ！
！！

クロノ「零！なんで逃がした!!! 答えろ！」

零「……今は言えない」

クロノ「お前！」

零「離せ」

零はクロノを突き放して背を向けた

クロノ「何処へ行く気だ」

零「少しやることができた（天狼守護騎士達の位置は分かるか）」

天狼「（はいさっきマークを付けましたから大丈夫です）」

零「……………そうかじゃあ行くか」

クロノ「待て！命令違反の件はどうする気だ」

零「後で受ける罰は受ける……………じゃあなクロノ」

そう言って零は守護騎士達を追う為に転移した。

零SideEND

続
く
・
・
・

第二十話（前書き）

明日はクリスマススイヴか・・・

あまり進みません

第二十話

クロノSide

クロノは零が何処かへ転移したあとリンディへと通信を入れていた

クロノ「すいません艦長、零が何故か分かりませんが守護騎士達を逃がしました。」

リンディ「その零さんは今何処にいるの？」

クロノ「・・・それが守護騎士達を逃がしたあとにやる事ができた。と言い転移して行きました。それと命令違反の罰は受けるそうです。」

リンディ「そう分かったわ・・・零さんについては彼が帰ってきて

てから直接聞きましょう、クロノはなのはさん達と帰還して」

クロノ「分かりました。」

クロノはリンディとの通信をきった。

通信を切ったあとすぐになのはとフェイトがクロノの所へやって来た

フェイト「クロノ、シグナム達には逃げられたよ。」

クロノ「その件は別にいいよ君達の責任はない」

なのは「そっいえば零君は？いないけど」

クロノ「零は守護騎士達を逃がしたあとに何処へ行ったよ」

フェイト「逃がした？クロノ一体どういう事」

クロノ「それは僕も聞きたいよ。守護騎士を追い詰めたあといきなり砲撃で結界を破壊したんだ。あとで理由を話すらしいから僕は帰還しよう」

フェイト「分かった」

そして僕達は艦長の所へと転移した。

クロノSideEND

零 Side

俺は天狼が守護騎士に付けたマークを追っていた。

天狼「マスターもう少しでつきます。」

零「そうか、分かった」

俺は周りに人がいないか見て地上に降りて阻害魔法を解いた。

天狼「ここでマークが止まっています。．．．それにほかの守護騎士達の魔力反応もありますから此処で間違いないと」

そう天狼が言っている場所は普通の家だった

零「本当に此処なのか？」

天狼「はい大丈夫です。それに守護騎士達以外の魔力反応がありません。多分それが魔導書の主と思います。」

零「……行ってみるしかないか」

俺はその家の玄関へいきチャイムを鳴らした

????「はい少しまってください」

すると家の中から関西なまりの声が出た。

そして玄関が開くと車椅子に乗った女の子が出迎えた。

????「えーとどちら様ですか」

零「夜遅くにすいません近くに引越してきた。村谷零って言います」

????「そうですか、それはどうもうちの名前は八神はやてです。
よろしく」

零「はやてかこちらこそよろしく……では帰りますね」

そう言つとはやては考えて……何かを思いついた顔をした

はやて「そや！今からうちの家今から夜ご飯なんよ零君も一緒に食べへん？」

零「いやいきなりだと悪いだろ遠慮しとくよ」

はやて「大丈夫今日は鍋やから別に一人ぐらい増えても変わらへんよ」

零「そうなのかけど家族の人はいきなりきて困らないのか？」

はやて「そんな事心配しなくてもええ皆優しいから大丈夫や」

零「分かったよ・・・じゃあご馳走になります」

そうはやてと話していたら奥の部屋からシグナムがやってきたそして俺の顔を見て

シグナム「主もう鍋の準備が出来ましたよ……お前は？」

はやて「あれシグナムは零君と知り合いなん？」

シグナム「えっいえそれは」

シグナムはそうはやてに言われると困った顔になった
零はその時シグナムに念話を送った

零「（シグナム少し話しを合わせてくれ）」

シグナム「（村谷、何故お前が此処にいる）」

零「（……それはあとで話すそれに俺は戦う気なんてない）」

シグナム「（分かった今はお前の言葉を信じようそれに今はこの状況をどうにかせねば）」

零「（俺に考えがある）あつあの時の人じゃないですか？」

はやて「零君シグナムとあった事あるん？」

零「ああ今日スーパーで会ったんだ。それにしてもはやての家族だったなんて」

はやて「シグナム、そうなん？」

シグナム「はい今日スーパーで会いましたね……今日はどんな用で？」

はやて「零君、うちの近くに引越してきたらしいから今日は挨拶にきたそうや」

シグナム「そうですね・・・始めましてシグナムです。」

零「こちらこそ始めまして村谷零です。」

はやて「今日の夜ご飯は零君と一緒に食べるから・・・鍋は皆で食べた方がおいしいやろうし」

シグナム「そうですね、じゃあ私は向こうに行っていますね」

はやて「うん分かったわ」

シグナムはまた奥の部屋へと戻って行った。

はやて「じゃあ零君も行っちゃうか？」

零「ああずつと玄関にいるのも悪いだろうし……お邪魔します」

はやて「はい、いらっしやい」

俺はそうして八神家に入って晩飯をご馳走になる事になった。

シグナムSide

私は管理局から逃げて主はやてと一緒に夜ご飯の準備をしていた。

・・・すると家のチャイムがなった

シグナム「誰でしょうか、こんな夜に」

シャマル「はやてちゃん私が行ってきますね」

シャマルが行こうとすると

はやて「ええよ、私が行くわシャマルとシグナムは鍋の準備をしと

いてな、それとシャマルは味付けしたらあかんぞ」

そう言いはやては玄関の方へと行った

シグナム「そう言えばシャマルどうやって管理局の結界を破壊したんだ？」

シャマル「それがあの村谷零君って子が結界を破壊したの」

私はシャマルの言った言葉の意味がよく分からなかった

シグナム「シャマルどういう事だ。村谷は管理局員のはずだろ？」

シャマル「それが私にもよくいきなり結界に砲撃を撃って破壊した後私に早く逃げろ！って言ったのよ」

シグナム「ますます意味が分からないな、まあ我らも危なかったのだから良いのだがな」

すると話しに入ってなかったヴィータが

ヴィータ「そろそろ、はやてを呼んだ方がいいんじゃないか」

シグナム「そうだな、では私が行ってくる」

私も玄関へ向かったのだからその玄関にいたのが

シグナム「主もう鍋の準備が出来ましたよ……お前は？」

はやて「あれシグナムは零君と知り合いなん？」

シグナム「えっいえそれは」

私はその問いになんと答えれば困っていた時村谷から念話がきた

零「（シグナム少し話しを合わせてくれ）」

シグナム「（村谷、何故お前が此処にいる）」

零「（……それはあとで話すそれに俺は戦う気なんてない）」

シグナム「（分かった今はお前の言葉を信じようそれに今はこの状況をどうにかせねば）」

零「（俺に考えがある）あっあの時の人じゃないですか？」

はやて「零君シグナムとあった事あるん？」

零「ああ今日スーパーで会ったんだ。それにしてもはやての家族だったなんて」

はやて「シグナム、そうなん？」

シグナム「はい今日スーパーで会いましたね……今日はどんな用で？」

はやて「零君、うちの近くに引越してきたらしいから今日は挨拶にきたそうや」

シグナム「そうですか……始めましてシグナムです。」

零「こちらこそ始めまして村谷零です。」

はやて「今日の夜ご飯は零君も一緒に食べるから……鍋は皆で食べた方がおいしいやろっし」

シグナム「そうですか、じゃあ私は向こうに行っていますね」

そう言っつて私は奥の部屋へ戻る時に村谷に念話を送った

シグナム「(村谷、あとで話しをしてもらっつからな)」

零「(分かったよ)」

村谷はそう言っつた、私はその言葉を聞いてドアをしめた。

シグナムSideEND

零Side

八神家で鍋をご馳走になったが俺がリビングに行くときグナム以外の守護騎士が驚いていた。

しかもヴィータは

ヴィータ「何でテメーが此処にいるんだよ！」

零「いやはやてにご飯を誘われたから」

シグナム「ヴィータ、良いだろ奴も後で理由を話すそつだ」

ヴィータ「うっ分かったよ」

シグナムが言うつと渋々納得した

そんな感じで八神家でご馳走になった。俺は帰る為に玄関へと行った

314

はやて「もう帰るん零君？」

零「もう夜遅いし帰るよ（シグナム）」

はやて「そつかきいつけてな」

シグナム「（何だ）」

零「俺が出た後シグナム達も来てくれ、外で待ってるそこで理由を話す」

シグナム「分かった」

零「じゃ帰るよ、鍋おいしかったぜ」

そう言い俺は八神家を出た

八神家を出たあと待っているとすぐにシグナム達はやってきた

シグナム「さて村谷、何故我らの居場所が分かった？」

零「それはあなたにマークを付けそれを追ってきたまでだ」

そう零は言いながらシャマルの方を向いた

シャマル「えっいつ付けたの」

零「あなたの後ろで天狼を向けた時に逃げられたもしもの為に付けました。」

シグナム「そうか、もう一つの質問だかお前はここの家の場所を管理局に伝えるか」

零「伝える気はない」

ヴィータ「そんな事信じられっか！」

零「いやこつちにも頼みたい事があるんだ」

シグナム「それは何だ？」

零「闇の書の採集を止めてくれないか」

シグナム「それは出来ない」

零「はやてか？」

シグナム「主は関係ない我らにはやらないといけないのだ」

シグナムはそう言い切った！

零「分かった……じゃあ人に対しての採集はやめる」

ヴィータ「それじゃ時間がねーんだよ！」

零「ちつ……じゃあ俺の魔力を採集しろ、それでやめる」

シグナム「分かった、今お前と戦っても勝ち目ないからな……本当に良いんだな？」

零「ああ良いぜ……けど誓え！人に対する採集はやめる！本当はやめさせたいがあなた達にも信念があるんだろ」

シグナム「分かった誓おう……では始めるぞ」

シグナムは闇の書を出してシャルが俺のリンカーコアをたしてきた

零「くっ……」

シグナム「採集開始！」

そのまま闇の書にリンカーコアを採集された

零「はあはあ」

シグナム「終わったぞ。それにお前一体何ものだページが一気に120ページも埋まったぞ」

零「ハハ……まあ気にするなよ、けどさっき言った言葉は守れよ」

シグナム「分かった」

零「じゃあ俺は帰る」

俺はシグナム達に背を向けて帰ろうとした

シグナム「お前とはもうぶつかりたくはないな」

零「まあいつかまたぶつかるとさ」

そう言って零はシグナム達から消えていった

続
く
・
・
・
・

零
S
i
d
e
E
N
D

番外編（前書き）

えーと年始なのでお正月のお話です

ではどうぞ

番外編

なのはSide

私は神社へお参りに行くためにフェイトちゃん・アリサちゃん・すずかちゃんの三人と一緒に零君を待ってたの

アリサ「零のやつ遅すぎない」

フェイト「まあまあアリサ・もう少し待ってようよ」

なのは「そうだよ・まってようよ」

アリサ「……分かったわよもう少しだけよ」

そう話していた時に

????「ねえ君達暇？」

????「俺達と一緒にいかない？」

いきなり派手な服装をした二人組に話しかけられた

すずか「・・・えーと私達人を待ってますので」

派手1「えーいいじゃん俺達と一緒に行った方が楽しいよ」

なのは「いいです」

派手2「そう断らなくてもいいだろ」

そっぴいなながら私の手を掴んでこよつとした時に

零「すいませんが俺の連れになんかようですか？」

・・・その時零君が来たの

なのはSideEND

零Side

零「やばいな・約束の時間はもう過ぎてるし急いだ方がいいな」

天狼「そうですね急ぎましょう」

走っていると目の前になのは達との待ち合わせ場所が見えてきたが

零「あれは……」

なのは達の近くに派手な服装をした二人組がいた

派手1「えーいいじゃん俺達と一緒に رفت方が楽しいよ」

なのは「いいです」

派手2「そう断らなくてもいいだろ」

そう言っつて男がなのはの腕を掴もうとした

零「あのすいませんが俺の連れになんかようですか？」

俺の姿を見た男達は

派手1「なに君俺達このお嬢さん達とお話があんだけど」

零「本当なのか？」

零はなのは達に聞くが

なのは「違つよこの人達がいきなり話しかけてきたの」

零「そう本人達は言ってますが？」

派手2「もつづるさいな君痛い目にあいたいの」

派手2は零を睨むが

零「本人達が嫌がってますからでは僕らは用事があるので」

零は男達の横を通りなのは達の所まで行った

零「さて行くか」

フェイト「良いのあの人は？」

零「良いんだよ」

アリサ「そうね行きましょっ」

零達が神社へ向かおうとした時に零は派手1に肩を捕まれた

派手1「ねえ君やっぱり痛い目にあってる？」

零「(天狼これって正当防衛でいけるかな)」

天狼「(あちらが攻撃をしてきたらなりますが)」

天狼と念話をしているとしびれを切らした派手2が殴りかかってきた

派手2「何無視してんだよ！」

零「(殴る軌道もわかりやすいしスピードも遅いな)」

零はそのまま殴りかかってきた派手2の拳を掴んでその勢いのまま派手2を投げた・・・投げられた派手2は受け身もとれずおもいつきり地面に叩きつけられた

派手1「テメー何しやる！」

零「いや貴方達のほうが殴ってきましたから正当防衛でしょこれは」

いつの間にか辺りには騒ぎを聞いてきた人達がいちそれを見た派手1は逃げに行った

派手「くっ覚えてろよ」

零「さて人も多くなってきたし早く行くぞ」

急にそう言われたなのは達は

すずか「えっ 零君？」

零「早くしろよおいて行くぞ」

フェイト「待ってよ零！」

フェイト達は走っていった零を追って神社を目指した

神社

そうしてお参りも終わり翠屋へ向かっている途中でフェイトが零に話しかけてきた

フェイト「零はなんてお願いしたの」

なのは「あっそれ私の気になるの」

アリス「私も気になるわね言いなさいよ零!」

すずか「私も気になるかな」

フェイトの言葉を聞いたなのは達も零に聞いてきた

零「皆と楽しく過ごせますようにだな」

アリサ「本当にそれだけ？」

零「ああ単純だけどそれだけだ」

フェイト「そうなんだ・絶対叶うよ」

零「そうだな・・・今年もよろしくな」

フェイト「よろしくね零」

なのは「「こちらこそよろしくなの零君」

アリサ「ふん！よろしくね零」

すずか「今年もよろしくね零君」

零「ああよろしくな！」

なのは「じゃ早く私の家に行こうよお母さんが料理を作って待ってるらしいから」

フェイト「そうだねなのは行こうか」

なのは達は翠屋に向かって走っていった……すると天狼が念話をしてきた

天狼「（マスター願ったのは本当にそれだけだったのですか？）」

零「（いやあと一つあるな）」

天狼「（それはなんですか？）」

零「（なのは達に降りかかる最悪から護る事だよ……出来るか分からないがな）」

天狼「（……マスターならきつとできますよ）」

零「（そうかありがとな天狼）」

アリス「何してるの零早くきなさいよ！」

零「ああすぐに行くよ」

零はそう言いなのは達に追い付くために走りだした

続く
・
・
・
・
・

幕
S
i
d
e
E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8275o/>

魔法少女リリカルなのは悪魔と呼ばれた少年

2011年1月3日00時25分発行